ドーグ
ハンド
洋花 画

特100
180

喜活劇

ドグラス

大正
9. 7. 29
内交

BANKS

ドーグラス君の生ひ立ち

ドーグラス● フエアバンクス君は、北米合衆國の中央を脊骨のやうに貫いて居るロッキー山脈の麓、コロラッド州のデンボアといふ市に、西曆一八八五年の五月、この世の光を見初めた。長じて中央學士院、及びコロラッド學校に學んだが、當時から恐ろしい運動好きで、書物は運動場の隅に投げ出して、野球をやる。フットボールを蹴る。金棒にぶら下る。何でも彼でも、運動と名の付くものなら、三度の飯ではないパンを、二度にしてもやりたいといふ位で、又それだけに旨かつた。

舞臺に立つたのは、一九〇一年で、フレデリック● ウオード氏やハーバートケルシー氏等と、喜劇を演じたのがそもそもの端緒となり、紐育のマンハッタン座に喜劇界の名優と歌はれたミンニー● ダブリー氏と出演して直ちに素晴

らしい人氣者となつてしまつた。

映畫界に轉じたのは三十一の時（一九一五年）で、先づトライアングル會社のファイン・アーツ映畫の製作に懸命になつた。一昨年日本で封切された「ドーグラスのはね返へり」などは、當時のものである。後にアートクラフト映畫に移つてから、いよ〳〵君獨特の妙技によつて、名聲を天下に馳せるやうになつた。「出たり這入つたり」「荒療治」「結びの神」「樂天生活」は、凡て同社最近の作品であつて、その天才振りを、遺憾なく發揮して居る。

ドーグラス君、當年三十六歳、前途は未だ長い。しかも君はチャプリン先生の如く大相場師でもなく、又マックス君の如く屋臺店を架ぎ廻す小商人でもなく、眞面目であつて皮肉に、滑稽であつて技巧の末に走らず、その藝は輕快にその眼は哲學者の如く輝き、その口は無邪氣な子供の如く笑ふ。洋の西と東とを問はず映畫界の人氣者として迎へらるゝ所謂である。

その映畫界の人氣者ドーグラス君の風貌を、深く愛活家諸君の頭の中に刻み込んで置きたい爲めに、私は最近日本に封切せられた同君の喜劇の中から左の五篇を拔いて、こゝに紹介するのである。

浦島三郎記

荒療治

荒療治

一　口から出委の理想

こゝに鬼でもなく番茶でもない娘十八、クレオパトラと小野小町と楊貴妃とを、水晶の鉢に入れて、美顔白粉を注ぎ込み、大理石の麺棒でこね廻して、作り上げたかと思はれる程の、至極可嚀な美人、名もエセルといふ當世型、たゞ難を言へば、ツンと濟した鼻先と、男をまるで狆のやうに考へて、面白半分になぶり廻さうといふ、劍呑な一癖のあることである。

ところが、これに人知れず思ひを寄せたといふのが、亂暴者といつては少し可愛相な男、馬術、弓術は更なり、ベースボールもやればボートも漕ぐ。庭球も旨いが、柔道は三段。殊にフットボールはお手のものだといふ。名もビリー

こいふ茶目式。素人目で見たら、二人ともよく氣が合ひさうで、暇なお翁さんお婆さんは、早速仲人口でも利かうと出掛けるのだが、さう安くは閻屋の愛の神が卸さない。

エセルは如何したものか、どリーが嫌ひだ。目や鼻の難作に難癖は付けないが、その亂暴な氣性が嫌。

「あんなお轉婆な男は、妾大嫌ひだわ。第一あの人だつたら、妾の言ふことを聞きさうにもない。妾はもつと、妾に對して忠實な順從な人が好きだわ。」

ミ、勝手極まる熱を吐いて居る。これぢや何方が亭主になるのか、女房になるのか、判つたものぢやない。先づ差し當り佛蘭西や白耳義であつたならば、この歐洲の大戰亂で、男が少くなつて女があり餘つて來たのだから、こんな强情なことを言へば、

「そんな女は此方から失敬する。」

と、誰一人相手にする男もなかつたかも知れないが、そこは女尊男卑のアメリカ、殊に十人十色、百人百色の男さまゞの趣味嗜好から、中には其れは面白い女だと寄り付かうとする者がないでもない。

それにエセルは素晴らしい美人といふ甘い汁を持つて居るので、近所近邊の若い男達が、蟻のやうに集まつて來るのである。

エセルは其れ等の男の動作や、顏付きを、嚴密に、試驗官のやうな態度で注意し、第一如何にして自分の御機嫌を伺はうとするか。第二に自分の夫として引き廻して歩くに、耻かしからざる容貌を整へて居るか。第三に自分の命令を一も二もなく遵奉し、且つ速やかにこれが實行することが出來るか如何かといふことを、吟味して見た。で、その嚴選の中に、榮譽あるエセルの戀人として取り上げられた男がチャリーである。

彼は△△大學卒業生といふのを、自分の專賣特許の如く考へて吹聽し、日一

日鏡の前に立つことを、最上の義務とし、頭髪はチックで塗り固め、その煉瓦壁のやうな顔を丹念に美顔水で撫で廻し、左手の指には、私は金持の道楽息子で御座い。」といはんばかりのダイヤの指輪をちら付かせ、右手には糸のやうなステッキを、持たねばならぬものゝやうに握り、

「おや、これはお嬢さんぢや御座いませんか。お早う御座います。……まあ、何といふいゝお天氣でせう。貴女のお顔が朝日の中に輝いて、大理石の像のやうに、いやダイヤモンドの女神のやうに、美しく思はれます。……なに御散歩……何方へ。あ、公園へ……ではお供いたしませう。」

と、御機嫌斜めならざるやうに、兩手をこすり乍ら、べラ〳〵と言上に及ぶ。

その氣障さといつたら、全く鼻持ちはならず、大抵の女だつたら、

「チェッ……人を馬鹿にしてるわ。」

と、ツンと横を向いて、知らぬ顔の半兵衛を極め込まふといふ段取になるのだ

が、其處がエセルの變つたところで、持ち上げられゝば、持ち上げられる程氣持よく、下に出られゝば、下に出られる程、可愛がらうといふのだから甚らない。

「チェリーさん。妾、貴方が大好きよ。ビリーさんのやうな亂暴者は大嫌ひ……貴方と一所に散歩して、彼の人に見せ付けてやらうぢやありませんか。」

「さう、……それは面白いお考へです。行きませう。彼の男も今頃は大抵公園を散歩する頃ですから……」

「第一あの人は野蕃人なのよ、妾達のやうな淑女と交際する方法を知らないのよ。彼那人がこの二十世紀のアメリカに棲息して居るかと思ふと、全く悲しくなつてしまふわ。」

「さうですとも。ビリーなんぞは南洋邊りへ持つて行けばいゝでせう。今に動物園の金の檻の中に叩き込まれる人種なんです。彼の男なんかには、私共の考

へて居るやうな高尚な、優美な思想は滅塵もないのですからね……だから纖柔な微妙な戀の味を、味はふことも出來ないのですよ。」

と、口から出委せの高遠なる思想を話し合ひ乍ら、お互ひに手を把つて、公園を散歩して居ると、これを後の方の木蔭から眺めて居たのは、話の主のビリーである。

大抵の所謂近代の男なら、人生が不可解で、運命が神秘でと、淺間山か華嚴の瀧か。汽車賃がなくて、時間が間に合はないで、其處までは行かないにしても、自棄酒の一杯も飲んで、チエリーの家へ押し掛け、一談判をしやうといふことになるのだが、そこは飽く迄も氣丈なビリー。

「都に居れば、度々こんな所を見せ付けられて、その度毎に女のことを考へなければならぬ。それよりも、メキシコの方へでも出掛けて、戀の憂さ晴らしに猛獸狩でもして暮さう。」

と、大膽な男もあればあるもので、失戀の結果が、遙々メキシコへ渡つて廣漠たる野原と、カウボーイとを相手に、今日は猛獸狩り、明日は乘馬と、男性的な生活の中に人生を樂しまうといふことになつた。

二　丸木造りの番小屋

恰度メキシコには、自分の叔父が農園を經營して居るので、ビリーは早速、何の挨拶もなく其處に乘り込んで行つた、丘と野の間に丸木造りの、至極お粗末に建てられたのが叔父の家の番小屋であつた。

前には果しなく海のやうに擴かつた野原がある。後には鬱蒼として生ひ茂つた大深林がある。空はきつぱりと紺青に彩られて居た、その中央から、太陽がかッと下界を睨み付けて居る。

「うむ、こりや痛快だ。第一この男性的な景色が氣に入つた。丸木造りの番小

屋も面白い。」

ビリーは大喜びである。

こころで次の日から、ビリーのお友達になる爲めにやつて來た連中はといふと、一挺の短銃を、ぐッと皮の袴下に呑まして、鍔廣の帽子を頭の上に挫へ付け、物凄い目をぎよろッと輝かしながら、胸を反らして腕を組んで居るといふ頗る以て溫順ならぬ、怖さうな小父さん許り。

「一寸でも間違つたことを言つて見ろ。俺の懷中の短銃が返答をするのだ。」

と、言はん許りの態度で、

「やあ。」

と、握手を求める。全く劍呑な人物である。

が、ビリーは驚かなかつた。却へつてその氣性が面白いと思つた。愉快な人間だ。何でも彼でも一直線にしか行かない男らしい人間だと思つた。で、彼も

柔道三段の兩腕をぐつと組んで、

「やあ、お早やう。」

と、大きい聲で挨拶した。ところがお互ひに氣が合つて居るものだから、直ぐに仲のよいお友達が、五人も六人も出來て來た。そこで、彼の魂は、變屈な都から遁れて來て、自由なメキシコの天地に樂しむやうになり、それと同時に、エセルのことも、忘れるともなく忘れ出した。

ところがある日のこと、都の友達から、久し振りに便が來た。その友達は、詩人だ文士だと、友達仲間からおだて上げられて居る男で、相變らず美文辭典でも漁つたかと思はれるやうな、所謂艶麗なる文句を繋ぎ合はせて都の有樣を長々と書き並べたものであつたが、最後に、

「……例の君の戀人であつたエセルさんも、近頃病ひの手に斃はれて、淋しい病室の中に呻吟して居る……」

こ、いふ文句が附け添へてあつた。で、彼は再び忘れて居た都のことを思ひ出して見た。又忘れて居たエセルのことも考へねばならなかつた。

「可愛さうに病氣で苦しんでるだらうなあ。」

彼はかう思ふと矢も橋も堪らなく、早速都に歸へつて病氣見舞でも言つてやらぬと氣が濟まなくなる。こがビリーの性分で、思ひ出したが最後、人に笑はれても罵られても、思ひ通りのことをしなければ、手が引かれぬこいふのだから始末が悪い。

彼は翌日メキシコの叔父や友達に別れを告げて、さつさと都へ歸へつて來たメキシコから經育へ——隨分長い道中で、日本の山の中の人達なら、水盃の四五度も酌み交してから、さて長々こ旅の注意やら別れの言葉やらを拜聽させられた上、向ふの峠まで見送りしやうとあつて、一家擧つてぞろ〳〵從つて出る、峠の上まで來るこ、今度は村境の橋の袂まで一所に行かうとなる。かう

して恐ろしい時間の不經濟を見なければならぬが、其處は萬事簡單主義で突飛なビリーこ、その心をよく知つて居る叔父の間柄なので、一寸隣へでも行つて來るといつた調子で、さつさこ都に歸へつたのである。

三　血の循りの悪い男

ビリーは都に歸へるこそのまゝ、自分の家へも寄らずに、直ぐこ詩人の家を訪れた。

「やあ。君か」

流石の詩人も、ビリーの動作の無茶苦茶に早いのに、吃驚したらしかつた。

「例の手紙を貰つたので早速、歸へつて來たのだ。」

ビリーは息を切り乍らいふ。

「ごうも素晴らしく早いんだね。」

「何しろ手紙を見ると、その翌朝出發したんだからね。」
「時に、あの手紙に何か急用でも書いて居たのかしら。……僕は少しも知らなんだが……。」
「急用……君には急用ぢやないかも知れないが、僕にとつては、却々の急用なんだよ。」
「それは一體何の用なんだ。」
「君も察しの悪い男だな。自分で書いて置き乍ら……實はそれ、あのエセルさんが病院に這入つてるといつたぢやないか。……僕の急用はそれなんだよ。」
此所まで言はれても、血の循りの悪い詩人には、一向その意味が判らなかつた。
「それで君は如何しやうといふのだ。」
「見舞つてやるのさ。」

「おい。人を擯ぐのも大抵にしておくれよ。眼の玉を丸くして來たので何事が起つたのかしらと、人の好い僕は恐ろしく心配したぢやないか。エセルさんの病氣見舞に、わざ〳〵メキシコくんだりから歸へつて來るにや及ばんぢやないか。」
「しかし、君も詩人に似合はぬ解らず屋だね。……そこが人間の情味の温いこころぢやないか。……ま珪屈はごうでもいゝ。君等と話してると貴重な時間を浪費してしまふ。それ〴〵よりも所を知らしてくれ。一體何處の病院に居るのだね。」
「本統に君はその氣で歸へつたのか。しかしそれはお氣の毒樣だね。君も知つてゐには違ひないが、あの女にはチャリーといふ戀人があるんだよ。」
「そりやもう疾くに知つてるよ。エセルさんは僕を愛してくれなくても、僕は兎に角あの女を愛してるんだ。そんな……そんなことは關ふものか。」

「さう言はれて見ると、もう仕方がない。教へてやらう。實は郊外の海濱病院に入院してるんだ。が、その病院が又變な病院なんだ。僕に言はせると、どんな理屈から割り出して、彼那おかしな病院を拵へたものか全然判らない。又病人の方にしても彼那ごころに入院しやうといふ氣が、何處ら邊りから出て來るか、一向に判らない。」

「君の言ふことは僕には少々判り憎いが、一體如何な病院なのかい。」

「ぢやア、言ふことを慶さう。まあ兎に角行つて見れば判るよ、流石の君も之には驚くに違ひないよ。」

詩人は獨でクス〳〵笑つて居る。

「ぢや行つて見やう。」

ビリーはかう言つて病院の所在を聞き彼の家を立ち出でたが、

「一體如何な病院だらう……全然の嘘でもあるまいな。」

と、道々考へ乍ら歩いた。

四　無學無才の先生

海濱病院、一名變妙病院と謂はれて居る。しかも海濱病院と言つたでは誰も知る人はないが、變妙病院と言へば、この界隈での名物で、その名を知らぬものは恥になる位る。

「それは變妙病院のことぢやありませんか、それなら、ほら向ふの林の陰に、白い建物の棟が見えるでせう……あれなんですよ、」

と、通り掛りの内儀さん風の女から聞かされて、

「さうですか。どうも有難う。」

ビリーは、スタ〳〵と行かうとすると、

「まあ、貴方もあの病院に入院するですのか。」

内儀さんは後から聲を掛ける。彼は面倒臭いと思つたので、そのまゝ黙つて病院の方に足を向ける。

「矢張り彼男も横着物で、變り物の仲間なんだらう。」

ビリーの後姿を、氣の毒さうに、又蔑むやうに見送り乍ら、内儀さんは呟いたが、そんなことには、一向お關ひなしで、ビリー先生ステッキを、右手にぶらぶら振り廻し乍ら、ドン〳〵病院の門へ這入つて行つた。

そこで一寸立ち停まつて、四邊を見廻した時、彼は流石に驚いてしまつた。そして次には全く感心してしまつた。

「なる程、變妙病院の價値は充分にある。」

と、首肯かねば居られない。

先づこの病院の患者はと調べて見ると、物が食べたいといふ病人がある。スープにパンに、ミルクに、それからカツレツ、オムレツ、ビフテキ、海老フライ……いくら食べても食べても、食ひ足りなくて、そして食べたくて仕方がないといふ胃病患者。又それと反對に、食べたくなくて困るといふ患者もある。

小さい蠣牡フライを二つと、スープをほんの皿の底に、「これでもスープで御座います。」といつたやうに入れたのを卓の前に置いて、

「こんなに澤山あつちや、見たゞけで食傷してしまふ。」

と、愚痴をこぼす。

「でも、これだけは食べて置かねば……」

と、院長さんのお言葉に、悲しさうに涙をポロ〳〵流し乍ら、蠣牡フライを丸薬のやうに小さく切り刻み、薬を飲むやうな苦い顔をして、一粒呑み込んでは空を怨めしさうに眺め、又一粒呑み込んでは、四邊を眺めるといふ素晴しい胃病患者もある。こんな連中ばかり居れば米價問題も何もあつたものではなく、立ち處に解決を見るに違ひない。

それかと思ふと、今度は至極神經質の患者があつて、一寸風が吹いて來て、頭の髮が動いても、無精にむづ痒くて、頭をガリ〳〵掻かねば居られないこいふ男、蚤の一匹でも止まらうものなら、それこそ歐洲大戰亂以上の大騷ぎを打つ始める。又反對に、何事にも無關心で暢氣で、遲鈍で、無神經で、人に捻られやうが、撲られやうが、たゞ「はあ〳〵」と笑つて居るこいふ至極落ち着き拂つた病人。それこそ火事があつて、自分の身體に火が點いても、燒け死ぬまでは笑つて居さうな患者である。

こんな一癖ある變な病人ばかり集まつて居る病院なんだから、その院長さんは、斯界の大博士か、さもなくば學理經驗共に豐かな大研究者かこ、素人目には思はれるが、事實はそれこ全く反對で、醫書の序文だけを二三頁繰つて見た位ゐの至つて無學無智識の先生で、何も彼も助手の手に委せ切り。でも助手だけは、ごうやら其處ら邊りの藪醫先生の代診位は勤めてもいゝこいふ程の實力

を持つて居るので、診斷から藥劑の調合まで一切を引き受けて居る。が、それでも至つて覺束かなく、賴りないここは判り切つた話である。

それにも關らず、續々と患者は入院して來て、常に病室が滿員となつて居るのは、誠に奇怪千萬な話。

「何か理由がなくてはならない。」

と、物好きなビリーが、いろ〳〵調査して見たところ、果して、それには實に似合はしい一大理由がひそんで居たのである。

患者の凡ては、

「院長さんは偉い方です。有り難い方です。」

と、日々に褒めそやして居る。それは、患者をそのまゝに投げ放しにして置いて、他所の病院のやうに、難かしい養生法を說いて、寢て居なくてはいけないとか、安靜にしなくてはいけないとか、少しも拘捉するやうなことを言はない

といふのが第一の理由である。第二には藥も苦いものや辛いものは拔きにして砂糖水か葡萄酒でごまかして置くので、飲み心地がよいといふ理由がある。

從つて病氣も却々治りさうにはないが、病人は我儘の言ひ放題、仕放題で、極めて安樂、

「これなら一生涯病院に居てもいゝわ。」

と、患者の方でも平氣なもの。だから來る病人も來る病人も、恐ろしい忘け者か、さもなくば無茶苦茶な我儘者で、主に精神に異狀を來たした者だが、さてそれが一年經つても二年經つても、決して治りつこはなく、返へつてだん〳〵募つて行くばかり。院長の方でもそれを募らせて、入院料を澤山に取らうといふ考へなのだから堪らない。

「エセルさんは、如何考へで、こんな所へ入院したのだらう……矢張り我儘なこころから好んで來たのぢやあるまいか。」

ビリーは考へて見た。が、このまゝに歸へるのも不本意だ、兎に角一應逢つて見やうと。案内を求めて、彼女の部屋へ飛び込んだ。

「やあ……」

彼は例の快活な口調で、かう簡單な挨拶を述べ乍ら、扉を開くと、エセルは如何も大儀さうに、首を捻らして横向きにその方を見たが、返辭をしやうともしない。

彼女の前の卓の上には、煙草の喫ひ殼が集つて居る。お菓子の喰ひかけが散らばつて居る。女の居間とは、とても受けこれぬ。

「エセルさん、御病氣は如何ですか。」

ビリーは强いてニコ〳〵し乍ら言葉を掛けて見たが、彼女はつまらなさうに、

「えゝ、別に變つたこともありませんの……貴方はメキシコの方へ居らつした

といふことを伺ひましたが、如何してお歸へりになつたのですか。」

問ひ返へされてビリーは、まさか、

「貴女をお見舞ひに……」

と、鼻の下の長さうなことも言へず、

「一寸用事が出來ましたので、昨日歸へつたのですが、貴女が御病氣だといふことを聞いて、早速出掛けたのですよ。」

と、笑顔を作り乍ら言つて見たが、彼女は嬉しさうな顔も見せなかつた。何だか笑ふのも大儀でならぬといつた風である。

五　おれは院長さまだぞ

「どうも、あゝ横著になつた日には、人間も終りだな。

ビリーは所在なささうに、彼女の部屋を出て來たが、フト思ひ出したのが、

自分が兼てから主張して居る自然療法……

「さうだ。一つ俺の自然療法を試めして見てやらう。屹度効果があるに違ひない。こんな時でなければ、切角の大發見も、不意にするやうになつてしまふ。」

彼は急に勇み立つて、院長に面會を求めた。二三ケ月も掃除をしたことのないやうな應接間の、芥の埋つた椅子に腰を下して待つて居ると、軈て現はれ出たのが、五十許りのお翁さんで、形ばかりの鼻眼鏡の上から、ビリーの顔を透して見乍ら、如何にも、俺は院長さまだぞ、と言はん許りに、ぐッと胸を反して、ごつし〳〵と床板を踏み鳴らしてやつて來た。そして先づ「エヘン」と勿體さうな咳拂を、いきなり一發吐き出して置いて、さて悠然と椅子の上に腰かけた。

「うん……私がこゝの院長ぢやが、何か御用でもお有りなさるかな。」

その窮窟さうな舊式のフロックと、チョッキの中から覗いて居る時計の金鎖

との調和が、いかにも變なので、噴き出さずには居られないが、ビリーは懸命で生眞面目な顔を拵へ乍ら、

「この病院をお譲り下さる譯にはゆきませんでせうか。私は一つ病院を經營して見たいと思ひますので……」

「フヽン、病院を買ひたいと仰しやるのか、それは賣つてもいゝが、萬事は金との相談でな。」

院長は親指と人指し指とで圓を拵へて見せた。

「一體幾ら出せばいゝのでせうか。」

「それぢやて……私も病院を賣つてしまへば、一寸商賣が出來なくなるからなまあ一生涯の生活費さへ貰へばもうこんな面倒な仕事はしたくないが……」

「で、結局幾許必要なんですか。」

「さうぢやな。見掛けたところ、餘り金が有りさうでもないから、まあ五萬弗

も貰へばいゝこいふことにしやうかな。」

「五萬弗……よろしい。早速買ひませう。」

ビリーは直ちに院長と契約して、翌日は五萬弗の現金を渡してしまつた。院長先生ホク〳〵もので、病院を賣り渡してしまふと、何處へか消えて行つてしまつた。入院患者には、無論何の挨拶もしないで。

そこでビリーは、いよ〳〵自由自在に、大發見の自然療法を、これらの患者に行ふべく、助手といろ〳〵の打合せをした。

「で、早速これに取り掛りたいと思ふが。」

ビリーが言ふと、

「そりや面白いでせう。いや確かに効果はあります。ではぼつ〳〵實行に取りかゝりませうかな。」

と、助手も大贊成である。

その日の午後、助手はその面積の廣い額を、皺だらけにして、眼鏡の底から絶望的な眼を輝かし乍ら、急に騒ぎ出した。

「さあ大變だ。いよ〳〵一大椿事が出來してしまつた。この病院に恐ろしい流行性寒冒が發生した。せめて西班牙風邪位ならいゝが、二十四時間の後には、必ずころりと斃れてしまふといふのだから堪らない。」

と、各病室を布告歩いたので、流石の暢氣屋連も、少からず驚愕し、

「それは一體如何して傳染するのでせうか。」

と、氣の短い女は、もう風邪にでも掛かつたやうな格好をして、心配さうに聞く。

「勿論空氣傳染ですよ。これが水や食べ物から傳染するのなら豫防もし切れますが、空氣が媒介するのだから、如何にもしやうがありません。」

助手は平氣の平座でかう言つて居る。患者の方ではもう心配で堪らない。其處の病室からも、此處の病室からも、集つて來て、この一大椿事の噂とりぐゝである。

恰度その大騒ぎのどたん場へ、悠々と乘り込んで來たのは新院長ビリーである。彼は馬鹿落ち着きに、落ち着いて、

「皆さん、私が新任早々こんな不祥事が惹起したといふことは、誠に遺憾に堪えない次第でありますが、出來たことはもう仕方がありません。こはいへこんな患者が發生したのは、全く病院の責任であつて、皆樣の不注意から起つたこゝではないのですから、飽く迄も私は皆樣の爲めに盡して、決して皆樣の爲めに、不便利を圖るやうなことは致しません。兎に角先づ何よりも先きに、この病院から遁れねばなりませんから、私が濱邊に着けて置いた船に、これから直ぐ乘つて下さい。皆樣を紐育まで送つて行つて、向ふの病院に收容するこゝ

に致します。」

こ、尤もらしく話し立てたので、患者一同やつと胸を撫で下して安心した。

恰度その時エセルの所へは、例の氣障なチャリーが見舞ひに來て居たが、これを聞いて、

「では私もその船で紐育へ參りませう。」

こ、言ふと、彼女も急に莞爾して、

『さうして下さるこ、妾も嬉しいわ。」

六　豆一合にパン三片

怠け者の患者連を、一杯に詰め込んだ小蒸汽船は、ビリーの指圖によつて、病院の裏の海岸を離れた。

波は穩やかだし天氣はよし、航海には持つてこいの日だつたが、どう進路を

誤まつたものか、たつた二時間位で行ける筈の紐育へ、三時間たつても四時間經つても、着きさうにもない、陸はだん〳〵見えなくなつて、たゞ渺茫たる青海原の上を、せつせこ走つて居るだけである。その内に日は暮れて、空には青い月が、ぽつんこ現はれた。

「まあ、こう〳〵夜になつてしまひましたわ。……何時になつたら、紐育へ着くここが出來るでせう。」

エセルはじれッたさうに呟く。

「どうせビリーのやることだから、碌なことはしないこ思つて居ましたが、餘ッ程航路を間違へたと見えますね。」

チャリーは、御機嫌をとるやうな調子でいふ。

夜は明けて、又暮れた。でも紐育どころか、島影一つ見えなかつた。患者の中にはそろ〳〵不平が起り出した。

「いくら吾々がお人好しでも、餘り院長は無責任だ。」

などゝ、ビリーの辭表勸告の大演說をやり出す者もある。

「病院にばかり居るよりも、結句この方が面白くていゝ。」

こいふ暢氣なことをいふ先生もある。かうして船は三日三晩波の上をさまよつた。

それだけならいゝが、四日目の朝には、突然船火事が起つて、皆は近所の島に避難しなければならぬ破目に陷つてしまつた。そしておまけにその島に上陸して見ると、殆と無人島のやうな所で、山の奥には人喰人種が居るこいふ騷ぎ皆は急に消化返へつて愚痴だら〳〵。しかし院長ビリーは平氣なもので、

「皆さん　皆さんは、とう〳〵私に欺されてお了ひなすつた。私は私の發見した自然的療法を行ふ爲めに、いろんな計企をして、皆さんをこの無人島に連れて來たのです。海濱病院の傳染病事件も、船火事も、皆拵へごとだつたのです

憤つちやいけませんよ。これもみんな貴方々の病氣を治す爲めなんですから…。皆さんはこれから、無人島の新鮮なる空氣を吸ひ乍ら、自炊生活をしなければならぬ。で、先づ毛布を一枚づゝと、二日間の食糧として、豆一合にパン三片づゝを差し上げますから、順ぐりに取りに來て下さい。」

と言つて、皆を見廻した。

「おい冗談しちやこまるよ。自然的療法か何か知らないが。第一吾々紳士を無人島に引ッ張つて來るなんて、餘りに蔑視した話ぢやないか。」

「それよりも、自炊生活をしろとは何事だ。吾々紳士淑女を何ご心得て居るのだ。」

「自炊生活もいゝが、豆一合にパン三片とは酷過ぎるぢやないか。貧民窟以上ぢやないか。物價騰貴で困るなら入院料を値上げにして貰ひたいものだな。」

方々から樣々な不平が、一時に起つて來た。

「ところが、それが自然療法の方法なんです。豆一合にパン三片が少かつたら海から魚を釣つて來てお喰べなさい。毛布一枚で寒かつたら、木で小屋を作り草を敷いて寢ればいゝてせう。」

ビリーは悠然としていふ、餘りのことにチャリーはムラ〳〵と肝癪玉を破裂さして、彼の前に進み出た。

「オイ、冗談も休み〳〵言へ。何だと……先刻から默つて聞いて居ればいゝ氣になつて、自然療法々々と大袈裟な看板を持ち上げて、吾々に自炊しろとは、何事だ。吾々はそんな下等な人種ではないのだ。……そればかりならまだいゝとしても、寒かつたら木で小屋を作つて、草を敷いて寢ろとは侮事だ。それは野蕃人のすることぢやないか。吾々紳士淑女に向つて、そんなことを要求する法があるか。」

と、むきになつて怒つたが、櫛に風でビリーは一向受け付けない。

「紳士は小屋を作る可からずといふ規則はまだないのですから……それにこれは自然療法の爲めなんですからね。はゝ……それでも氣に喰はなかつたら、海を泳いで歸へるか、又は山の奥に這入つて人喰人種に喰はれてしまふより外に方法はありませんよ。」

かう強く出られて見ると、全く仕方がない。仲間外れになつてしまへば、三片のパンも貰ふことが出來なくなるので、兎に角、皆はブツ〳〵言ひ乍ら、毛布と豆とパンとの分配を受けた。

七　凡人の淺間しさて

でもチャリー及びエセルを始め、患者連の鼻息は荒い。

「あんな野蕃な人種と一緒に居れば、吾々の估券に掛る。吾々紳士淑女は、別に露營地を見付けて自炊するのだ。」

と。しかし紳士淑女先生達には、下男を叱り飛ばし、女中のお尻を蹴飛ばすことは出來ても、所謂下層社會（？）のやること――芋の煮えたどころか、豆の煮えたも御存じないので、その日から早速大弱り。

豆も燒いてあるこか、煮てあるこかすれば、非常に好都合だが、生憎く生のまゝなので、何こかしなければ、こても喰べられさうにもない。こ言つて、煮るこいふ段取になるこ釜もなし、竈もないので、手の付けられさうにもない。が、恰度幸ひにも、一人の男がアルミニウムの洋盃を持つて居たので、これに豆を入れて、焚火の上で炊くことになつた。

横着な連中も、ちやんとして居る譯には往かないので、枯木を集めたり、水筒に水を酌んで來たりして、どうやら煮えさうになつて來た。

ところがビリーの方では、自炊生活はお手のもので、鮑の殼を捨つて來て皿にする。ブリキの碓片で鍋を拵へる。おまけに襟卷の糸を解き、襟卷止めを曲

げて、糸こ釣針こを拵へ、早速魚を釣りに出掛けるこいふ遣り方。助手は助手で、山の方を探し廻つて蕈を探つて來る。そこで素晴しい山海の珍味を並べての御馳走。

紳士淑女連は、瀧石横着で氣取り屋のお揃ひだけに、そんな面倒臭い田夫野人のするやうな趣向を凝さうこはしないので、たゞ拙さうに豆こパンこを喰ひ合はせて居るだけである。

その内に日は暮れかゝる。

ビリーは助手と共に、一生懸命になつて、近所の木を切り、これを組み合はして堀立小屋のやうなものを造り、その下に枯草を敷いて、チヤンこ寢る場所を拵へてしまつたが、紳士淑女連は、相變らずの放任主義、依賴主義で、誰一人そんな手數の掛るものを造らうこいふ者がない。

日はトップリと暮れた。

ビリーこ助手こは、小屋の中に這入つて、ヌク〳〵こ寢ることが出來たが、紳士淑女連は、思ひ〳〵に一枚の毛布にくるまり乍ら、寒い思ひをして草原の上に轉がり始めた。チャリーは上着を側の木の枝に掛けて置いて、木の根を枕にし乍ら寢込んだが、エセルは枕にすべきものもなくて、そのまゝに轉がつてしまつた。かう不自由になつて來ると、お互ひに愛も倚もなくなつて、個人主義になるのが凡人の淺間しさである。

皆が寢靜まつた頃、ビリーは院長の職責上、一應その寢樣を見る爲めに、小屋を拔け出して、紳士淑女連の寢て居るところを廻つて來た。するこエセルが身を縮こませ乍ら、頭を土地に着けて寢て居るのを見た。

「可愛さうだな。」

彼はかう呟き乍ら四邊を見廻すこ、チャリーが掛けて置いた上着がぶら下つて居るので、それを持つて來て、クル〳〵と丸くし、彼女の頭の下に、枕の代

りに置いてやつた。そして又自分の上着を脱いでそッこ毛布の上から掛けてやつた。が、彼女はすや〳〵こ眠つて居て、そんなここは少しも知らなかつた。

朝が來た。

チャリーは目が醒めて、上着を着やうとしたが、昨夜掛けて置いた筈の上着が見えない。目を二三度こすつてよく見たが矢張りない。

「まさか消えてしまつたわけでもあるまい。」

と、よく〳〵四邊を見廻すと、エセルの頭の下に枕になつて居るのがそれであつた。彼はブン〳〵憤つた。折角大切な、皺一つ拵へないやうにして居た上着が、無雜作に丸められて居るので、

「貴女も隨分酷いここをしますね。」

と苦み切つてエセルに言つた。もうかうなるこ愛も戀もあつたものではない。

「オヤ、妾は少しも存じませんのよ。」

エセルはこぼけて言つた。

「ダッテ貴女は御自分の枕にして居たぢやありませんか。」

彼はブツ〳〵言ひ乍ら、上着の芥を拂つて着た。その時からチャリーと彼女この間には、取り去ることの出來ない溝が出來てしまつた。

八　腹の虫の勞動問題

ビリーと助手とは、朝早くからせつせこ立ち働いて、旨い御馳走に有り付くことが出來たが、紳士淑女連は、一人として働く者がない爲めに、何の食物も出來なかつた。三片のパン一合の豆は、さう何時までも殘つては居ない。腹の虫はそろ〳〵勞働問題を惹き起して、生活の安定を絶叫しやうとする。殊に幾許喰べても喰べ足りないこいふ胃病患者の婦人などは、全く氣の毒な程に消化返へつてしまつた。

「矢張り院長さん達のお仲間に這入つて、何か喰べさして貰はないこ、もう生きてることが出來ませんわ。」

こそろ〳〵弱音を吹き出す。

「だつて、彼那野蕃人の所へ行つたら何をさせられるか判らないでせう。」

チャリーは頻りに引き止めやうとしたが、生活の大問題には打ち勝てない。

「もう野蕃人の仲間でもなんでも構ひませんわ。」

こ彼女は宗旨を代へて、ビリーのところへやつて來た。

「私の命令通りのことをお遣りになれば、私共の仲間に入れて、御馳走も差し上げます。」

こ、ビリーに強く出られても仕方がない。

「え、何でも遣りますわ。」

こ、以前の空威張とは似もつかぬ憫れさ。

「ではこれから、午前は三時間、午後は四時間、必ず運動をなさい。新鮮な空氣の中で。」

「でも妾のやうな肥つた者には、駈け足ごころか、普通の歩行でさへ困難ですから、體操のやうなことは、とても出來ませんが……」

なる程、ビヤ樽を立てたやうに、何方が縱か横か判らぬ程に、丸々と肥つた女――。

「ぢや斯うしなさい。始めの内は草原の上を、蛇がのたくるやうに、ゴロ〳〵轉がつて歩きなさい。その内には身體が自由になつて、走ることも飛ぶことも出來るやうになりますから……。」

「蛇の眞似ですか……もつと高尚な眞似はありませんかね。鶴か鷲のやうな……。蛇とは餘りなさけないぢやありませんか。」

「イヤ、强つてとは言ひませんから、お氣に召さないなら、お廢めなすつても構ひません。」

ビリーはいよ〳〵强く出るので、いよ〳〵絶體絶命、人間の一番の慾望は喰ふといふことで、それの爲めには、どんな事でも遣らなければならぬ。ビヤ樽の婦人は、とう〳〵その蛇の眞似をすることを約束して、ビリーの仲間に入れて貰つた。

それからといふものは、早速廣い野原の上を、のたくり始めたが、運動になる爲めに消化もよく、凡て身體の具合が調子よくなつて、中々氣持がいゝ。

その内に、妾も私もと、紳士淑女連が、だん〳〵喰ひ詰めた揚句、ビリーの仲間に續々這入つて來出した。で、ビリーは一人々々に格好な運動を敎へて、毎日時間通りにやらせることにした。その内にエセルもチャリーも、とう〳〵我を折つて降服する。

かうして鳥の眞似をする者があること思ふと、猿のやうに木に登る稽古をす

る者がある。こゝ暫らくは、新動物園の光景――。

晝は晝で、爽やかな空氣を腹一杯に吸ひ込み、氣持のよい日光を頭の上から浴び、夜は夜で、自分達が木の枝を組み合はして堀立小屋に寢るこいふ有樣で一箇月も經つと、各自にスッカリ體格がよくなつて來た。勿論横着らしい、自分で拵へ上げたやうな病氣は盡く取り除かれて、

「何日までもかうして居たい。」

こいふやうな希望を皆が述べるやうになつたが、こゝにチャリーだけは、根が性根が曲つて居るので、如何にも面白くなく、そッと皆の目を盗んで、山の奥の方へ逃げ出した。山の上には人喰人種が居て、誰かやつて來れば、直ぐに飛び付いて喰つてやらうこ、毎日見張りをして居たのだが、今日はその人喰人種も流石に疲れたものか、草の上に、ゴロリこ横になつて、大鼾をかいて寢て居る。

鬼の留守の間に洗濯ではなくて、鬼の寢てる間に逃やうと、チャリーはその間をこつそりと拔けて見るこ、山の向ふには――今の今迄無人島とばかり思ひ詰めて居たのに、何のこつた。綺麗な町があるではないか。

「オヤ……街だ……」

彼は尻餅をつかん許りに驚いた。飛び上らん許りに喜んだ。そして一目散に山を駈け下つて行くこ、其處には立派な道路があつて、恰度一臺の自働車がやつて來た。

「オーイ、その自働車待つてくれ。」

彼は出來るだけの聲を絞り上げて呶鳴り乍ら、スタコラ走つて行つて見るこ二度喫驚、その自働車の主は、紐育で棄ねて顔馴染のお友達である。それこそ地獄に佛ごころの騒ぎではない。

「一體此處は何といふ處かい。」

彼はきよとんとした眼付きで、狐にでも欺されたやう。

「氣味の悪い顔をするなよ。……此處が何處かなんて君も案外物識らずだね。此處は經育から十里許り離れた海岸ぢやないか。」

友達はゲラ〳〵笑ひ乍ら、猶ほ山の向ふの海岸はビリーが買ひ込んで置いた土地だといふことを説明したので、始めてチャリーは

「はゝん。」

と合點した、人喰人種も實は本物ではなくて、ビリーが皆を逃さない爲めに置いた番人であつたのだ。

九　義俠心を發揮して

「でもエセルさんを彼那こころへ置くのは、毒蛇の前へ蛙を置くやうなものだ。何でも救つてやらねばならぬ。」

と、チャリーは、つまらぬ所へ、大いに義俠心を發揮して、その友達と二人連れで、翌日短艇に打ち乘つて、元の海岸にこつそりとやつて來た。

すると恰もよし、エセルは一人で海岸に遊んで居たので、走り寄つて

「さ、エセルさん、私と一所に行きませう。ビリーの奴は私達を欺して居たのです。こゝは無人島でも何でもなく、經育の近くの海岸なんですよ。」

と、せき立てた。以前のエセルなら、

「さうですか……では直ぐに……」

とでも言つたのだらうが、その時は既に遲かりし由良之助で、エセルは知らず識らずの内に、ビリーの快活な性格に、全然心を奪はれて居たのだから堪らない。

「ハア、さうですか。」

と、濟ましたもので行かうともしない。

「早く行かうぢやありませんか。吾々は態々迎ひに來たのですよ。」

「二人で歸へつて下さい。妾は矢張りこゝに居ますから。」

と、遂には木で鼻をくゝるやうな御挨拶、でもチャリーの方は、厭でも何でも引ッ張つて歸へらねば腹の虫が納まらぬと見えて、無理矢理に連れ出さうとする。エセルは行きまいとする。ドサクサの眞最中へ、ビリーがやつて來た。

「オイ。何をするんだ。」

「貴樣の知つたことぢやないわ。」

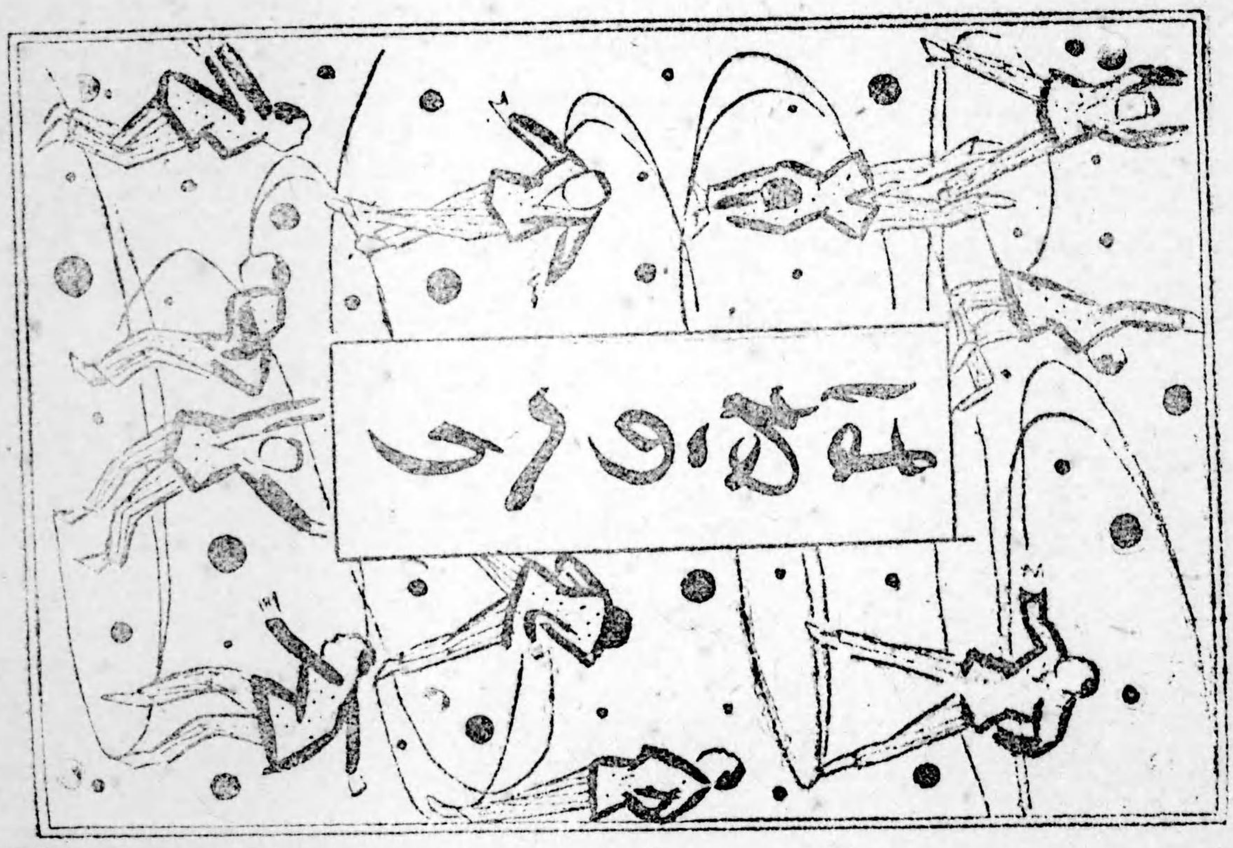
二言三言、言ひ交はす内に、ビリーと二人とは遂ひにお定まりの取ッ組み合ひを始めたが、何しろ永年運動で鍛へ上げたビリーの腕には敵はぬと見えて、二人とも、散々砂の上に投げ飛ばされ、放々の態で、豫定ではない、餘儀ない退却。でもその捨て臺詞が面白い。

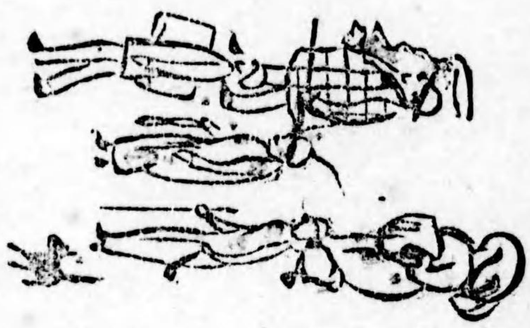
「野蕃人には敵はぬ。」と。

エセルの方では、

「野蕃人でも何でもいゝわ。人に投げられて、握り拳一つ振ることの出來ないやうな男を亭主に持つたら、第一心細くて頼りなくて、氣の毒で仕方がないわ……」

(完)





跳れ廻り

一命の瀬戸際

世界文明の粹をあつめた佛蘭西からは、一衣帶水の地中海を隔て、殊に西班牙からは僅に二十五哩の海のあなた、應と呼べば應と答へるモロッコの國。何事ぞ今も古の風を其のまゝ、茲ばかりは歐洲の文明が避けて通つたと見えて、少し奥へ行けば蕃人の爲に、旅行もうつかり出來ぬ有樣。

其のモロッコ國はアトラス山の南、サワラ沙漠の地つゞきだが、近郊一帶に土人の市街をなした所がある。茲は土人の酋長バジャーの所有にかゝる牢屋の一室、四方も上下も頑丈な岩、唯入口と隣へ通ふ口とが有るばかり。此處へ這入つたが最後、未だ曾つて生きて出た者が無いと云ふ場所、其の正面に一人の

青年が、兩手を揚げて立つて居る。大の字なりの横棒は、右も左も太い鐵の鎖のついた錠で、岩の鐵に取りつけられて居るのである。アッ煙が！　爆彈々々其の足下を見よ、導火線からは盛に火を發して、今五分間も經つたなら、火は爆彈に燃え移るだらう。哀れな青年の五體は、岩と共に粉微塵になるべき運命は、時計のセコンドを刻む音の、此の世で百こは聞かれまいと思はれる程である。

げに危機一髪の青年の運命よ、銀座淺草の本通りに、卵を轉がして置くよりもまだ危い玉の緒、思はず足下を眺めては、我が身の不幸に、無念の涙ハラハラと落すかと思ひの外。これは又何事ぞ、立ち昇る煙を見ては、大口開いて誰はゞからぬ高笑ひ。こ奴餘りの悲しさに、氣でも狂つたのか。氣も狂はずにか程の度胸、體中が膽で出來て居ても中々出せぬ筈。それとも自分の命の玉は、誰かに預けて置いてゞも來たのか。

或はさうかも知れない。此の男の命の玉を頂かつた者は誰！　鬼か、非ず。神か、非ず。薔薇の花さへ其の前へ出ては、恥ぢて頭をうな垂れたと云ふ、美しい一人の乙女が、ごうか命を助けて上げ度いと、自分の命の危いのも忘れて奮闘して居るのである。が其處は女の不甲斐なさ、策の施すべきものも無く、たゞ徒に心を惱ますばかりで、時は刻々に移つて行く。

一方曾曼のバヂャーは、己れが戀の目的物たる物言ふ花を取られては、第一此の地方一圓の總大將たる威嚴に關すると思つたかごうか、直ちに各地へ懸賞廣告を出して、此の女を捕へ來つた者には多額の賞を與へると振れ出したのである。慾の皮を千枚にも二千枚にも張り固めた者の多いのは、どこの國でも同じことである。來の隅々何處も彼處も草を分けたり石を起したり、助ける人も助けらるゝ人と同じ運命の渦中に投ぜられて、二個の卵の何れが先に、人の足に掛るのかさへ分らぬ有樣であるが、一體此の青年は誰、ごうして玆へ捕へら

れたか、少し以前に遡つて說明しやう。

二　たたんてしまへ

サワラ沙漠の砂を蹴つて走り行く一臺の自動車がある。輕妙な運轉振は、車も人も一體の樣に、砂の山と言はず谷と言はず、平地の樣な速さである。空飛ぶ鳥よりも速い、水の中行く魚よりも速い。

この青年、國は米國生れはニューヨーク、名はジョーヂ・トラベルと言ふ。美男子とは言はれないけれども、併し男の中の男らしい顏つき。引き締つた其の口元、キラ〳〵と人を射る樣な其の眼の光、だが其の光にはすご味は無くて唯何となく人を引きつける樣、殊にたま〳〵ニツコリ笑ふ時には、得も言はれぬ温か味を感ぜずには居られない。

と、又一臺、今度は自動自轉車が現れた。一人の土人が之を操縱して居る。

これも可成り速い、走るわ〳〵、走つて彼の青年を追つかけて行く。茲に二臺の車は競爭の樣な有樣を演じ出した。然し土人は青年の相手では無い、幾度か後振り返つては待つてやる、近よると又走り出して、砂の山々を蹴散らして行く。日は西の山に傾いた。西の山と言つても砂の山である、低い山が幾十里と果てしも知れず連つて居る。おゝサワラ大沙漠の日の暮るゝ景色！　夜の扉は大平原を閉ぢて行く。青年も自動車も、砂の山も此の土人も夜の幕に包まれて了つた。

地球の廻轉に淀みなく、トラベルが車上に一睡した間に、太陽は再び東の方へと廻つて來た。壯嚴な沙漠の日の出に、森羅萬象は再び映じ出されて、次の日の舞臺が開展した。

「ア、アーッ」

と兩手を高くさし上げて、天を呑む樣な大きな欠伸一つすると又ハンドルに手

が掛る。大平原を渡る沙漠の朝風に、靜かな波を吳れながら、車は南へ〜と蕃社を指して進んで行く。

諸君はモロッコに、恭順地方と不順地方との有ることを御存じでせう。不順地方と言ふのは、主として山間部に棲息する本來の土人屬で、群雄割據の狀態をなし、玆には政府の力も何等權力を持たずに、斬り取り强盜勝手次第。昨日はあの蕃社ここの蕃社と鬪つた。今日はこの蕃社の者が某の蕃社へ攻めて行くこいふ有樣。仕事に從事するのは女ばかりで、男は常に爭鬪をして居る所などは、大亂中の歐洲よりも、まだ〜熱心に行はれて來て居る。

況して玆は蕃社中でも勢力のある、酋長バジャーの配下の部落、部落を彼等の城廓として、他部落の者は敵と心得て居る。今トラベルの自動車が、蕃社を指して、砂塵を揚げて進んで來るのを見ると、直ちに酋長の命令一下、乘馬隊の隊長モロッコの率ゆる一隊は、戰鬪準備して出動をする。斯こも知らぬ青

年は、快を叫んで速力を加へ、今や蕃社の入口へまで來た。

「待てッ！」

言葉鋭く、馬上の一人は呼び止めたが、青年に其の言語は解せられなかつた。

少しはハンドルの手を緩くして、知らぬ顏して進んで行く。

「待てッ、待たぬかッ。」

兩び彼等は聲を掛けた。徐行の青年が初めて後を振り向いた時、土人等は今にも矢き掛りさうな姿勢をして、其の勢を鎗に見せてゐた。青年の大膽不敵な膽魂は、こんな時に勢負けすることが、大嫌ひだつた。聞えぬ振をして、相變らず進んで行く。

「己れッ」

と言つた蕃人の一人は、馬から飛び下りると、大手を廣げて行手を遮つた。

「エイ面倒だ、轢いて了へ。」

氣の短い青年は、車に速力を吳れて、土人目蒐けて一直線。バッと立つ砂煙と共に、土人の體は突斗打つて二三間先へ跳ね飛ばされた。番人共の立腹したことは申すまでもない。

「夫れ、あの奴を疊んでしまへ。」

手馴れた駒に一ど鞭くれて、てんでに鎗を打ち振り打ち振り、砂塵を蹴立てゝ追つかけて行く。貴樣等位に疊まれて堪るものかと、ぐッと向き直つてハンドルに兩手を掛けたが、いや其の早いこと。沙漠に馴れた土人の駒も此の男ばかりは相手に出來ぬ。したが好事ばかりは問屋で卸さぬ、行手に上る砂煙、正しく他の一隊が玆にも又現れたのである。

三　アラーの神樣

狼狽へる奴が無分別を仕出かす樣なきわどい場合に、膽魂の据つた奴は却つ

て面白い藝當をやる。とても車では逃げられまいと見て取るや否や、青年は一番先頭に立つた土人目蒐けて突進した。馬と車、ドッと突き當るかと思ひの外土人は左るものヒラリと駒を脇へそらす。と見る間に車から飛び上つた青年は馬上の土人に飛びついた。二人は組んだまゝ砂の上へ落ちる、土人を殺すのが目的で無い彼は、土人を砂の上へ叩きつけて置いて、ヒラリと駒に飛び乘つたと同時に道をそらして砂山目蒐けて一目散。

砂山を越えた向ふには、土人達が寢ころんで、話したり眠つたりして居る。其の中の一人が、寢ころびながら一匹の羊と遊んで居るのが目についた。後からは根氣よく、土人達が追ッ掛けて來る。其の瞬間、青年は一策を案じ出したと彼の羊の居る傍を通る時、馬上より手をさし伸べた手練の早業、羊は早くも彼の手の中に抱きかゝへられて居た。青年は一ときは駒を早めて走り出したが寢ころんで居た土人共は、「それッ」と言ふと一齊に起き上つて、又追擊軍に加

はつた。

青年は又砂山を一つ越えた。向ふに二三人の土人が立つて居る。後振り返つて見れば、まだ土人共は姿を現さぬ。めたゝ思つた青年は、土人の一人に羊を渡してやつた。何も知らぬ土人は、不意の出來ごゝに一時呆氣に取られてゐた。然し羊を見ると、子供の樣に喜んで、抱へて見たり高く上げて見たりして居た。

砂山の上まで來た土人共は、遠方から此の樣子を見て取つた。其の中の一人は叫ぶ。

「ソレ、あそこに羊泥棒めが。」

皆の者は一齊に、其の方へと走つて行つた。然し其の時には御本尊の青年は駒の頭を立て直して、砂の山蔭傳ひに自動車を置いた方向へゝ走つて居た。

間も無く彼は元の場所へ來た。そして再び自動車上の人ゝなつて、大膽にも

番人の街へゝ入りこんだ、此の向ふ見ずの猪、が、街の途中でパッタリ行き會せたのは、前日自動自轉車で追つかけた例の土人であつた。

「オ、あなたは！」

此の土人はめづらしく英語が話されるのであつた。勿論怪しげな發音では有るが。

「あなたは昨日、私を普通の土人と考へ違ひして、隨分私に追はせましたね。實はあなたに助けて戴き度いことが有つて、會つてお願しやうと思つたのでしたが、イヤあなたの車の早いこと、とゝ〳〵日が暮れたので、すごゝと歸りました。兎に角あなたは、酋長の一家に見付かつちやあぶない。サア早く私と一緒に參りませう。」

土人にヒラリと自動車に飛び込んだ。そして車の上から道案内をする。やがて街を出ると、或る頑丈な岩屋の前へと來た。土人は先に下りて青年を促す。

後からついて行くと、岩屋の入口まで來た。ここを何うしたのか、鐵の扉が音も無くスーッと開く。

「サアお這入りなさい、アラーの神樣が屹度あなたをお救ひ下さるに違ひありません。あなたは少しは恐ろしいことが有つても、安心してお出でなさい。」

アラーの神樣ッて一體何物か青年は知らぬ。兎に角まだ恐ろしいと思つたことは無いョと言つてやりたかつた。こんな事を考へて居る間に、土人は再び扉を締めて出て行つた。

「あッ了つた！」

青年は初めて氣がついた。見れば此の部屋は一方口である。試みに入口の扉を引ッ張つて見た。が堅い鐵の扉は一分の隙も見せぬ。何處か仕掛けは無いかと探がして見たが、手に觸るゝものは堅い岩ばかりであつた。殆ど失望した青年は、今度は反對の方の壁の下へ來た。隣の室とを仕切る爲に、茲は石で疊んだ壁一重、一間餘り高い所に、タッタ一つの窓があるばかり。若しや窓からと思つた青年は、ヒラリと身を躍らせて、鐵の格子に飛びついた。そして外を見た。

「あッ！」

流石の青年も是れには驚いた。見よ獰猛な獅子の一ト群、然かも飢えに飢えて居る彼等は、此の新來の肉塊を見るや、一齊に「ウォー」と吼え出した。オ、何と言ふ恐ろしい聲だらう。青年は直ちに窓から飛び下りた、そして今までは出口をと願つた身の、今は成るべく間の石壁が堅い樣にと願つて居た。これだけの厚い壁、いくら獅子でも破つて來ることは有るまい。よも有るまいと凝視むる壁、其の疊まれた石の壁が、丁度人の立つた程、次第々々に浮き出して來る。アラ不思議！　目のせいか。悲しやな、其れは目のせいでは無かつた。靜かに浮き出した石疊が、扉を開くやうに、右へ開くと、後が大きな穴になつ

た。

四　物言ふ人形

大膽不敵の强者も、空元氣の好い似せ者も、常に變りは有るものじやなあ。たゞんうした命の瀬戸際に、噪がず臆せず最善の身構へをする所にある。青年は直ちにピストルの狙を定めた。穴から出たら擊つてやらう！　併し出て來たものは獅子では無かつた、天女の樣な一人の女、覆面の儘近寄つて來る。青年はまだ油斷はしなかつた。ミ、二三歩前で立ち止つて、靜かに上げた覆面の中は、世界の美術家が寄つてたかつて作り上げた人形の顏、何ことふ美しい出來であらう。

「よくお出で下さいました。お驚染かしうございます。」

オ、、人形にしては物言ふが不思議なり。さては誠の人間か、それにしても

此の蕃地、然かもかゝる所へ、何うしても不思議だ。

「失禮ながら、あなたは米國のお方、私も米國生れでございます。昨日お連れした土人、あれは長らく私達の召使つて居ります忠僕でございます。彼れに聞きますと、あなたもやはりニューヨークださうで、私達もニューヨーク生れ、色々深い事情が有つて、茲の酋長の爲に斯うした拘束を受けて居ります。兎に角ぞうぞ母にお會ひ下さいませ。オ、恥かしい、私としたことが、餘りの嬉しさに話が前後して、定めてお分りにくかつたでせう。あちらでゆつくりお話申し上げませう。」

不思議に眞の美人と言ふものは、聲まで銀鈴を振る樣である。青年は無言でついて行つた。再び以前の石疊が靜かに開く。注意しながら穴から出ると、其處は獅子の居た所では無くて、狹い樓下になつて居る。不思議な所に不思議な入口が幾つも有つて、終に此の天女の居間へと出た。其處には彼の母親も居た

し、例の忠僕も居た。此の母親の話によると、夫と共に商賣の爲め、此の土地へ來たのは今から三年程前であつたが、フトした事から茲の酋長に金を貸りたのが元となつて、今に至るまで金は拂はれず、酋長の爲めに此の家で、殆ど牢屋と同じ樣な拘束を受けて居ると。然かも酋長は度々やつて來ては、無理なことばかり言つて行くといふ。其の夫は、可愛い、妻と娘とを、蕃人の家に殘して、哀れ昨年歸らぬ旅に立つて了つたと、親子諸共相抱いて、ヨヽとばかりに泣き沈む。と、さつきの忠僕があわたゞしく飛び込んで來た。

「酋長樣が見えました。酋長樣が見えました。サ、あなたは早く何處かへ身を隱さねばいけません。其の化粧部屋へ。早く早く。」

青年が次の間へ行くと殆ど同時に、酋長は這入つて來た。

「オイ、約束の金は出來たか。勿論未だ出來ないだらうな、アハヽヽヽ。仕方がないから約束を履行する。實はお前の夫と、若し金が拂はれない時は、娘を

渡すといふ契約がしてある。ごうだ金を拂ふか娘を渡すか。今日はごちらかに型をつけて貰はう。」

「どうか、度々で申上にくうございますが。ごうか今度だけは、せめてもう一日……」

「こらッ！　馬鹿にするな。其の言葉を何べん聞かせた。よしッ。もう仕方がない。オーイ供の奴、此の娘を引ッ張つて行けー」

「どうかさう言はないで……」

「エイ五月蠅！　邪魔するなッ。」

次の間では、青年が此の樣子を戸の隙間から見て居た。俠氣に滿ち〳〵た向ふ見ずの生れ、何で承知がして居られやう。

「これ待てッ。」

言ふより早く青年の後から兩手で聲を遮つた者がある。何時の間にか忠僕が來

て居た。そして小さな聲で、

「今出る時ちや有りません、今に屹度よい時が參ります。マア短氣は止めて、しばらく時期をお待ちなさい。」

忠僕は手を合せて止めて居た。母親は弓を離れた灯提の樣に、よろ〳〵として這入つて來た。そして青年の肩に攝かまつてヨ、とばかりに泣いた。

五　魔の天

茲に酋長バジャーが邸宅の一室、此の世から成る極樂淨土。金銀に輝く大廣間には、美しい鳥、可愛らしい獸類が、野原の樣に遊んで居る。中央に有る大浴槽には、水晶の樣な水を湛へて、數多の天女が浮かんで居る。浴槽から上つた天女、侍女に着物を着せて貰つて居る天女、寢ころんで猫をあらしてえんで居る天女、ダンスをやつて居る一團の天女、是等を合したら約二十八は居るだ

らう。何れも蟬の羽の樣な着物を着て、頭も體も寶石　光で、眼も眩むばかりである。別に黑い着物の侍女二十人ばかり、宛かも女王に侍く臣下の有樣、團扇で風を送つて居るもの、體を拭いて居るもの、着物を着せて居るもの、夫れ夫れ天女の世話に餘念が無い。

其の昔、釋迦の考へた極樂淨土、クリストの頭に描いた天國とは、恐らく斯うした場所であつたらうとさへ思はれた。これぞ酋長バジャーの集め集めた美妾の一團である。彼の女達はどれほど幸福であらう、と言ふのは誠に皮想の觀察で、美衣美食に飽いた天女達も、たまには外へも出たからう。父母が有つたら會ひたからう。然し其れはならなかつた。絕對にならなかつた。彼の女達の天地は此の外には無いのである。勿論男子禁制の場所、酋長の他は如何なる男と雖も、曾つて此の間だけは見た者が無い。若し誤つて這入つたが最後生かして外へは出さぬからである。入口々々には半月刀を持つた番兵が、眼を皿の樣

にして見張つて居る。若し又相愛の男と引別けられて、斯かる一室に閉ぢ込められた女が有つたらどうだらう。

今日から此の一團に加入した、新しい一人の天女がある。美しい、眞に美しい天女、酋長第一のお氣に入りでさへ、此の天女の爲に疎略にされるだらうと、他の天女共が惜れ〴〵と見とれて居た。すると二人の羅服の侍女が、何かヒソ〳〵と相談をしたが、其のことは誰も知らなかつた。やがて、其の中の一人は、入口の方から出て行つた。番兵も侍女だつたので、別に咎めもしなかつた。

話變つてトラベル青年は、色々母親を慰めて、今に娘を取り返してやるからと、安心はさせて居たものゝ、さて碎實に奪ひ盜すと云ふ妙計も無く、多少心を惱まして居ると、コト〳〵と入口の扉を打つ音がした。

忠僕が手を引いて這入つて來たのを見ると、曾つて此の母親に召使はれて居

て、大變世話になつたことの有る女、今では酋長の樂天地の間で、天女の世話をして居る者であつた。

「體のお話は、お孃樣から聞きました。今日は幸隣部落の酋長が來て、二人で酒を飲んで大分醉ふで居る樣子です。私の着物を着て這入つたら、番兵も餘り咎めますまい。サア一時も早くお孃樣を……」

青年は早速變裝をした。少し女にしては體が大きいけれども、幸ひ此の地方の女の服裝が、眼だけ出して後は包む樣に出來て居るので、誠に好都合であつた。

話は再び以前に返つて、酋長の邸宅では、今日は隣村の酋長の爲め、盛大な宴會が催された。主人も醉ふた、客も醉ふた。樂天地始まつて以來の大珍事出態、主人自ら規則を破つて、今日は男の珍客に自慢する爲め、二人で此の大廣間へ這入つて來た。二人共千鳥足！

「どうぢや俺の極樂に？　貴樣の氣に入るのが有つたら、ごれでも一つ、いらうオッと待つたり。茲に居るのは、是れはやれないぞ。これは未だ今日持つて來たばかりぢや。他の奴なら何れでも、貴樣、取れッ」

醉ふて舌も碌に廻らない。新來の天女をぐッと抱き込むと、酒臭い息をゲープ。

客の酋長も醉ふて居る。

「アハヽヽ、俺は其んな人形の樣な奴は嫌ひだゾ。俺が强いから、女も强さうなのがお氣に入りだ。オーイ、其處に居る下女、其の體の大かい奴！　俺は貴樣が氣に入つたゾ。サア來い、二人でダンスをやれ。」

酋長の手が侍女の體に觸るゝよと見る間に、肩に擔いで頭突撞！　機を喰つた酋長は、一つ返つて浴槽の中へ、ザンブとばかりに飛び込んだ。

「ヤア、其の女怪しいゾ！」

飛び掛つて來る酋長バジャーも、體をヒラリと替さたので、機を喰つてヨロヨロとする奴、後からドンと突かれて、之れも浴槽の中へザンブとばかりに飛び込んだ。

サア、酋長の邸宅では、上か下への大騒ぎである。番兵達の報告によつて、早くも乘馬隊は出動して、樂天地の周圍を取り卷いて了つた。蟻の這ひ出る隙も無い。青年は直ちに娘を連れて、外へ飛び出す筈であつたが、其の時はもう遲かつた。土人共は雪崩の樣に入口から這入つて來る。仕方がないから、娘を小脇に抱き込んだまゝ、階段か上の方へと登つて行つた。

六　人間の振子

「ソレ逃がすな」

敵に後を見せたので、勢を得た土人の一隊は、直ちに青年を追跡した。先

頭に立つた五六人は、青年の足にかゝつて、階段の下へ蹴飛ばされたが、後から〳〵と追ふて行つた。青年はとう〳〵一番上まで登りつめた。もう此の上は屋根が有るばかりである。屋根まで上れば其の上は、天へ上るより外に道は無い。下へ下りやうにも一方口の階段には、早や土人共が押し掛けて來て居るので、こても下りられさうにも無い。前へ進むにも向ふの樓下へまでは十間ばかりの庭を隔てゝ居る。

フト眼についたのは一本の綱であつた。猿の樣に身の輕い青年は、綱の一端を取るより早く、スル〳〵と柱を攀ぢ登つて、其の一端を高い軒端に結びつけ今度は綱傳ひに下りて來た。長い綱は上から宙にぶら下つて、蛛蜘の吐いた絲の樣になつた。青年も宙にぶら下つて居る。一ト振り二タ振り、體を前後に振るよゝ見る間に、時計の振子と同じ樣に、前へ後へ振り出した。こ思ふとヒラリ身を躍らせて元の樓下へ歸つて來た。綱はやはり手に持つて居る。其の時

には最早や土人の五六人は、樓下の上へまで追つて來て居た。然し青年は片手に娘をしつかり抱いて、片手を綱に卷きつけるこ同時に、樓下の柱をドッこ蹴つた。二人の體は宙へ飛んで、餘る力で向ふへこついた。アレヨ〳〵と騷ぐ時には、娘は既に向ふの樓下に立つて居た。

大きな振子の青年は、もう一度元へこ振り返へされて來た。何の爲めか知らこ見て居るこ、どこまでもあばれ者に出來た此男め、今や樓下の手すりに乘り出した酋長の頭を、柱代りに、イヤといふ程蹴飛ばして、其の反動で再び向ふへ振られて行くと、飛鳥の樣にヒラリと樓下へ飛び下りた。

最早や綱は歸つて來なかつた。其の一端は、向ふの家の窓から、遙か地面へ下げられた。猿の樣な青年は、驚き呆れる土人共に一瞥を呉れながら、娘を小脇に抱い込んで、スル〳〵こ下りて行つた。そして茲に漸く虎口を免れた二人の者は、一散に其の家の方を指して急いだ。

家の入口まで歸つて見ると、既に忠僕は自動車の用意をして待つてゐた。

「サア早く〳〵、兎に角皆んなで一ト先づ茲を落ち延びませう。」

今や自動車が出發しやうとする時に、乘馬隊の隊長モロッコの率ゐる一隊は早くも之を取り卷いて了つた。茲に青年は再び大活劇を續けたが、何分相手は多勢のことゝて、遂に彼等に縛り上げられて、モロッコの前へ引き出された。併し外の者は幸にして、辛くも此の場を逃げ去ることが出來た。

隊長は意氣揚々として、先頭に立つて此の捕虜を連れて行く。其の後からは乘馬の一隊が、鎗を揃へて護つて行く。諸君は進歩した我々の思想で、土人達の心を判斷してはならぬ。彼等の考は非常に幼稚だ、まるで子供の樣である。だから案外無邪氣な所もあれば、又すこぶる大膽な所もある。或は又馬鹿々々しいこともある。飽くまで圖太く出來たジョーヂ青年の頭に、ソロ〳〵又例の惡戯氣が起つて來た。

「オイ、隊長、君は英語が判るかい。」

併し隊長殿には、悲しや英語が判らなかつた。何だか妙な言葉でムニャ〳〵云つて居る。

「ハヽア、君は英語が判らないな。馬鹿だなア貴樣は。オイ、貴樣は馬鹿だなア。」

言ひ乍ら隊長の顎をツルリと撫でゝやつた。モロッコ隊長殿、英語は判らないけれども、併し自分を譽めて呉れるいだらうと思つて、ぐッと肩を一トゆすりすると、ニコ〳〵笑ひ出した。

「アハヽヽ、馬鹿と言はれて喜んで居るのは貴樣ばかりだ、だから貴樣は拔作だと云ふのだ。な、オイ、さうだらう？」

今度は肩で、ぐッと隊長の肩を突いてやる。先生相變らず得意滿面。

「オイ、貴樣本當に拔作なら、僕の此の手を解いて呉れないかい。お禮に頭の

一つ位張り飛してやるよ」

クルリと後向きになつて、縛られた手を突き出すこ。さつきから大變譽められて、上機嫌になつて居る隊長殿は、此の人數だから、手位解いてやッたつて、逃げ出す樣なことは有るまいこ、御親切にボッ〳〵綱を解き出した。最早や青年の手は自分のものとなつた。

「サア約束だ、お禮をしてやらうか。少し痛いかも知れないが、一時の辛抱だ我慢しろ。」

未だ隊長殿判らない、大方お禮を言つて居るのだらうが、ナニそれには及びませんこいふ顏つきで、ニコ〳〵して居る横面へ、電光石火の拳コッが一つ、發止！「あッ」と、叫んで隊長は倒れた。再び乘馬隊は入り亂れた。青年は當るを幸の大奮闘。見る〳〵五人十人は打ち倒されたが、茲に新手の應援團は加はつた。不運な青年の奮闘空しくして、再び彼は捕はれの身となり、遂に酋

長が常に極惡人を葬り去る、石の牢屋へ入れられて、明日をも知れぬ運命となつた。

七　哀れの戀

「オイ、モロッコ、貴樣牢屋に繋いである、例の若い奴を殺して來い」

「酋長、此の役目だけはどうか他の者に……あいつ私の頭をガンと喰らはせました。どれほど力が有るか分りません」

「馬鹿ッ、貴樣が拔作だからあんな目に會ふのだ。第一相手は牢屋の中で、手も足も縛りつけて有るのぢやないか。行けッ！」

茲でも隊長先生、拔作こ言はれて居る。

「ですけれど、あいつ又だましますから……」

爾暴な樣でも、蕃人は案外罪が無い。一度恐いこ思ふと、どこまでも恐いの

である。併し曾長の命令には叛かれなかつた。其處で苦しまぎれの一策を案じ出し、小さい爆彈を用意して、部下二三名と牢屋の方へ急いだ。

牢屋ではジョーヂ青年。當り前の者ならば、泣くか叫ぶかする筈の所を、大膽不敵の膽魂、まるで人事の樣な心持で、今にどうかなるだらう位に考へて居る。と、其處へ前日の隊長がやつて來た。あの時は餘り旨くだまし過ぎて、少しは可愛さうであつたと思つた。然し今日は何しに來たのだらう、と見て居ると、やがて懷中から小さな爆彈を取り出した。「あッ」と驚くかと思ひの外、これは又意外、まるで子供に玩具を見せた樣に、ニコ〳〵しながら眺めて居るモロッコ隊長も、前日の手が有るので、今度は少しの油斷も無い。遂に導火線に火を點じて、青年の足下目がけて拋り込んだ。そして自分達は隣の方へ逃け込んで、チョイ〳〵來ては樣子を見て居つた。導火線は盛に煙を發して、其の長さを縮めて行く。と同時に青年の命も、ジリ〳〵と縮まつて行くのであつ

た。實に青年の運命は、危機一髪の間に迫られて居る。曾長も命令はして置いたものゝ、一體どうしたのか知らと、同じく牢屋の方へやつて來た。

茲に曾長に一人の娘があつた。此の間からのジョーヂ青年の活動の勇ましさやら、其の氣骨稜々たる男振に、哀れ初めて戀知り初めて、獨り心を惱まして居たが、蕃人の家に生れた悲しさには、殊に父曾長の手前もあり、せめて此の心だけでも通じて見やうか、其れも笑はれんかと幾度かためらふのであつた。少女の初戀の恥かしさは、何處の國とて同じことである。唯一人、娘の此の戀の同情者があつた。それは朝晩身の廻りの世話をして呉れる大仲よしの侍女であつた。ア、あの方、恐ろく附近の部落中でも、あの方に敵する者は有るまいお父さんでさへ、あの方ばかりは手に合はない樣子、此の間も妾を奪つて逃げた時、お父さん達は投げられた。彼の女、あれは一體何だらう。強いばかりか彼の女に對して、大變優しく親切であつた。えゝあの女が悔めしい！

娘が獨物思ひに耽けつて居る所へ、あはたゞしく飛び込んで來た御氣に入りの侍女。

「お孃さま、お孃さま、大變です。今あのお話の方が、爆彈こかで殺されるさうです」

「えッ！　本當？」

娘は無意識に飛び上つた。命に掛けても救つて上げ度いこ、瞬間の中に決心した。こ急いで石牢の方へと駈け出した。實に間髪を入れざる危急の場所で有つた。今導火線から爆彈に火が燃え移らうこ云ふ所へ、娘は無意識に飛び込んだ。

「娘危いッ！」

父の言葉も耳に入らばこそ、夢中に取り上げ、爆彈は隣室の方へ拋り出された。おゝ其の時、實に其の時、爆彈は大音響こ共に破裂して、あたりは一面

煙と化して了つた。

煙は次第に消えて行つて、あたりは又再び映じ出だされた。幸多き青年よ、此の大騒ぎの中にも、泰然自若として顔の筋肉一つ動かさずに居る。父の胸に顔を埋めたまゝ、ヨヨこと泣いて居るのは娘である。自業自得こ云ふも可愛さうだが、彼の隊長共の一行は、隣室に枕を並べて倒れて居る。

切なる娘の願には、流石の父酋長も動かされた、遂に青年は許されて、再び元の自由の體となつたのである。娘の願は許されて、青年は自由の體こなつたけれど、其の胸に秘めた第二の願は、遂に此のまゝ永久に、娘の胸に秘めたまゝであつたらう。一禮して歸り行く、戀しいなつかしい後姿を、何時までも何時までも見送つて居た。向ふの砂山へ一度隱れて、次の砂山ですつかり見えずなつた後までも、やはり娘は見送つて居た。最早やあたりに誰も居らぬ。あゝ淋しい、私一人が取殘されて、もう何時まで待つて居たこて、とてもあの方

が來ることは有るまい。これが永久のお別れだらうか、せめて心の中だけでも申上げて、可愛さうな奴と思つて戴いたゞけでも、それで私は滿足であつたに。いつそ後から追つて行かうか、さうした所で、とても私の望が叶ふぢやなし、アヽ私は淋しい〳〵此の土地で、死ぬまで泣いて暮します！。砂の上へバツタリ倒れた娘は、いつまでも〳〵同じことを言つては泣いて居た。

八　蠻地よさらば

話變つて父酋長は、茲に全部落へ懸賞を出して、自分の家から逃走をした、米國の娘を探し出した者には、多額の賞金を與ふべしと振れ出したのである。そして傍ら部下の者を所々に派して、同じく其の行衛を探索した。一部落と言つても可成り廣い。併し开處は酋長の勢である、殆ど一小國に近い部落の隅々、殘る所なく探し廻つた。遂に彼等は發見け出された、忠僕が扉から顔を出

した爲め、乘馬隊の一行に發見されたのである。

娘達一行は捕へられて、酋長の前へ引き出された。可愛さ餘つて憎さが百倍とは、此の事を言つたものであらう。酋長はひどく怒つて居た。

「こ奴等を悉く殺して了へ」

部下の者に命じて、殺すことになつた。娘は再び父の袖にすがつて、嘆願した。

「何卒此の人達も許して上げて下さい。若しお父樣、私が誰かに殺されたら、あなたは何んなに悲しいでせう。若し亦私に思ふ人が有つて、戀しいなつかしい人が有つて、其の人が誰かに殺されたとしたら、私は何んなに悲しいことでせう。殺した人を、どれほど恨みに思ふでせう。お父さま、どうか此の人達を許して上げて下さい。そして無事に國へ返して上げて下さい。これが私の、私の最後のお願です。お父さま……」

何か言ひ掛けて、餘りの悲しさに、再びヨヽと泣き沈む。アヽ何と言ふ美しい心であらう。土人の心は單純ではあるが、文明の智識には遠くはあるが。其の質朴　心根の、一點傷りのない所に、並居る誰もが泣かされた。未開地の女然かも處女の初戀だもの、思ひ詰めたら熱烈だらう。然し其處には邪心も惡念も無い、一旦綺麗に諦めたら、眞如の月の冴へ渡る樣に、唯思ふ人の誠の幸福を願ふのであつた。

砂又砂のサハラ大沙漠を、北へ〳〵と走り行く一臺の自動車、中にはジョーヂ青年の顏が、常より一トきは晴やかである。傍には人形を乘せたかと思はるゝ彼の女、其の母、其の忠僕、幸福なる一行の者は、今更の樣に、バジャー酋長の家の方角を振り返つた、思ひ出多き蕃社よ！　哀れな女の泣いて居る蕃社よ！　イザさらば。

俄かに行手に起る砂煙、直ちに現れた乘馬の一隊、さては！　一つ免れて又

一つ、茲にも敵は未だ有つた。再び格闘は開始された、ジョーヂ青年の奮闘振の勇ましさよ。直ちに先頭に立つたビープと言ふ奴を、車から馬上へと飛び付くや否や、砂の上へ叩き伏せた。一隊の者は忠僕の操縱する自動車を追ふて行く。

どこまで跳ね廻る青年だらう。どこまで惡戯ッ兒に出來た青年だらう。彼はポケットからナイフを出して、ビープのモヂャ〳〵の鬚を切り初めた。切り終るゝ之を自分の顏にクッ附けて、手早くビープの着物を着た。立派な土人の隊長が出來上る。まだ惡戯が足らぬ青年は、又ポケットから切手を一枚出して、ビープの面へ張りつけた。額の上へは鉛筆での走り書き「獨逸國カイゼル陛下へ送る。ジョーヂ青年より。」

傍にはビープの馬が遊んでゐる。彼は飛び乘るよゝ見る間に自動車の後を一目散！　聞も無く土人の一隊に追ひついた。此の附近一帶の土人は、常にモロ

ッコ軍の攻撃を受ける。此の時にも亦モロッコ軍の一隊が遙か彼方に現れた。ジョーヂ青年は土人の群に飛び込むや否や、其のモロッコ軍を指し示した。そして常に聞て知つて居るので「突撃！」の會圖をした。土人共はやはりビープかと思つて居る。

土人共が、モロッコ軍と衝突して居る時には、青年は砂を蹴立て、自動車の後を追ッかけて居た。遂に之に追ひ付いて、馬上より車の中へヒラリと身を躍らせて飛び込んだ。

「アレーッ」

人形の驚いたのも無理は無い。青年は最早や忘れて居たが、自分の面は鬚もぢやの土人であつた。其の附鬚を取り去つたのを見れば、オヽ！　天にも地にも唯一人、頼りに思つたジョーヂ其の人。頼りに思ふばかりか、今日此の頃では何となう、戀しくなつかしい戀の芽生へが、私の心にしたのであらうと、自

分でさへ氣のついた程の時。今も今とて此の人の事を、信じながらも心配して居つた。餘りの嬉しさに、思はずピッタリ寄り添ふて、男の膝に落した一ト雫！　夢か、夢ならば何時までも〳〵醒めずに居たい。だが酋長の娘どんが、こんな所を見たら何こしやう？　おゝ美しい平原の入り日！　これが見納めの沙漠の夕景色！

樂天生活

樂天生活

一　金糸鳥の相手

「金糸鳥さん、お早やう。今日も一緒に遊ばうぢやないか。狹つこいかも知れぬが、その籠の中で、お前さんの持ち前の綺麗な聲で歌ひ乍ら、飛び廻つておくれ。私も一緒になつて跳ね廻らう。」

暢氣者のゼリーは、例の大きな口を、人目を憚らずに一杯に開いて笑ひ乍ら鳥籠を覗く。金糸鳥はたゞツィ〳〵と優しい聲をして啼き乍ら、きよとんとゼリーの顏を眺めた。

「や、これは又御叮嚀な御挨拶だね。……今日もいゝ天氣だ。ほらあの窓の方を御覽。青天井がにこ〳〵して覗いてるだらう、こんな日には私も心が晴れ晴

れするお前さんも氣持ちがいゝだらう。さあ踊らう。……おや忘れて居た。まだ朝御飯を上げて居ないね。さうだ、すつかり忘れて居た。さ、美味い朝御飯をたんと上げやう。」

彼は小さい茶碗に、麥粉をこねて、そつと小さい籠の扉から差し入れてやつた。

「旨いだらう。うんとお上り。遠慮は決して要らないよ。いくら物價が騰貴したつて、お前さんの食物に不足はさせないから、安心してお上り。」

金糸鳥はその小さい嘴を、ちよい〳〵と茶碗の中に尖つ込んで、時々きよろ〳〵とゼリーの顏を見る。

「旨さうだね。お腹が減つて居たんだらう。」

ゼリー君は一生懸命になつて、金糸鳥の御機嫌を伺つて居る。

こゝは金糸鳥の籠をぶら下げて置くには、少し不調和な銀行の一室、金糸鳥

はこの銀行では一番偉い頭取さんが最愛の小鳥で、ゼリー君は一方銀行の事務員として受け付けの大役を受け、一方又金糸鳥の召使となり給仕となりお守番となつて、朝から晩まで、眞に休む暇のない働き振り。大低の男なら勞働時間の問題でも叫び出して、その揚句には同盟罷工か怠業か、さもなくば爆裂彈の一二發も、お見舞申して、銀行を打つ倒さうと、物凄い計企でも始めるのが落ちだが、そこは暢氣者のゼリー、殊に持つて生れた氣性から、動くことが大好きで、靜然として四本足の腰掛の上に、卷煙草を喰へて、天井を眺めて居るやうなことをするのが大嫌ひ、何でも彼でも、飛び廻り跳ね廻つて、何時でもにこ〳〵笑つて居たいといふのだから堪らない。

朝早くから出勤して、金糸鳥を相手に、遊び廻つて居る。金糸鳥が籠の中で右に飛べば、自分も同じやうに右に跳ね返へり、金糸鳥が左に行けば、自分も左の方へ飛び廻る。そして赤ん坊をあやすやうに、籠の所へ口先を出して、

「ばあ……」

といふ、側から見ると正氣の沙汰ではなく、始めての人は葦原將軍の薫陶を受けさせる爲めに、巣鴨、ではない松澤村の精神病院へでも架ぎ込まねばならぬと心配する程だが、當人は至つて平氣なものである。殊に銀行の社長さんは

「ゼリーは面白い男だ。無邪氣で快活でいゝ。人間も彼いふ風に製造しないといけない。」

と、中々以て信任が篤く、その急性しさから始まつた過失などは、大似大目に見流がされて居るといふ有樣。

二　浮む瀬がない

こころが或る日、ゼリーは毎日の日課として居る行水を、金糸鳥に使はさうして、

「金糸鳥さん。又清潔いな水で、身體を洗つておくれ。」

といひ乍ら、籠の中から摑み出し、小さい金盥の中に足を入れてやつた。すると金糸鳥は、氣持ちよさゝうに、二三度羽ばたきしたが、軈て何を考へたか、ゼリーの隙を窺つて、ひよいと飛んで逃げ出した。

「おや」

と呆氣に取られて居る内に、金糸鳥は開け放してあつた窓から

「さよなら」

とも何とも言はないで、苦もなく拔け出した。

「さあ大變だ、あの金糸鳥を逃した日には、第一自分の商賣がなくなつてしまふ。いやそれどころではない。例の社長が禿頭を眞赤にして怒るに違ひない、さうなると輕くて無罪放免、重くて切腹……」

ゼリー君大いに心配して、取るものも取り敢へず、あたふたと、追跡に移つ

た。金糸鳥は

「こゝ迄お出で、甘酒進ぜう。」

と言つた風に、平氣な顔をして、面白さうに飛んで行く。

「おーい。一寸待つてくれ。お前さんに逃げられては、僕は浮む瀬がない。頼むからもう一度歸へつておくれ。」

と後から聲を掛け乍ら追つて行つたが、金糸鳥は、だんだん高く飛んで行つて大通りの高い建物の屋根に止つて、さて久し振りに下界の有樣でも眺め乍ら、一休みといふ段取になつたので、ゼリーもすかさず、窓を傳つて一生懸命で、屋根の上に上つて行つた。

「金糸鳥さん。お前さんは餘りぢやないか。あれ程仲のよかつた僕を振り切つて、挨拶もしないで逃げて行くなんて、餘り人情がなさ過ぎるぢやないか。僕はお前さんの爲めには、如何に盡してやつたか知れやしないよ。」

と口說き乍ら近寄つて行くと、金糸鳥は

「それは有り難う。」

とも何とも言はず、ツィ〳〵と言つたまゝ、又軒を離れて隣の屋根の方へ飛んで行く。ゼリーは猶ほその後を、屋根から屋根へ飛び乍ら、從いて行く。

その内に金糸鳥は、屋根の上から道路の方へと下りて行つたので、ゼリーも敗けぬ氣になつて、道路の方へ飛び下りたが、恰度その下を一臺の馬車が通つて居たので、その馬の背に落ちてしまつた。

「こいつは有り難い。恰度いゝものが來てくれた。」

彼はかう考へて、馬の尻を叩き乍ら金糸鳥の後を追及する。

何時の間にか、街を抜けて郊外の野原に出て來た。ゼリーは馬から降りて、又追つて行つた。金糸鳥は時々木の枝に止つて疲れた羽を休ませ乍ら、きよろきよろと彼を振向いて、

「まだ追つて來るな。」

と言はん許りに、ツィ〳〵と啼いた。

「お前さんが何處まで逃げても、私は追つて行くんだ。一番大切なお前さんに逃げられて堪るものか。」

ゼリーはかう言つて、又勇を鼓し、額の汗を拭つて追ッ駈けやうとすると、突然、横合の方から聲を掛けたものがある。

「おい、君は何をしてるのだい。一生懸命に大切な汗を流して……」

「何ですつて……」

彼が振り向いて見ると、其處には髪の毛を長く延ばして、詩人とも逸人とも判らぬやうな風體の男が、にこにこ笑ひ乍ら、草の上に足を投げ出して居る。

「一體何か素晴しい大事件でも持ち上つたのかい。眼をきよろ〳〵さして、何を捜して居るのだ。」

「僕……僕は金糸鳥を追つて居るのです。僕の主人の金糸鳥が逃げ出したものだから……」

「何……金糸鳥を追つて居る……止せ。そんな無駄なことは廢せ。金糸鳥が籠の中から逃げるのは當り前のことだ。籠の中へ入れて置くのは無理なことだ。君はこの世の中に自由といふいゝものがあるといふことを知らないのだな。そしてその自由を誰もが欲しがつて居ることを知らないのだな。」

「知つて居ますとも、其處こと位る。」

「ぢや金糸鳥を自由にさしてやつたらいゝぢやないか、それが自然だから。」

「だつて、逃がしてしまつたら、金糸鳥はいゝかも知れませんが、僕が困つてしまひます。第一主人から大變なお目玉を頂戴しなければならなくなるのです。」

「君は一體何をしてるのだ。」

「僕はあの金糸鳥の番をして居るのです……」

ゼリーは毎日の自分の仕事を、一々話し立てた。

「謂はゞ金糸鳥のお守り役だな。……では君も矢張り金糸鳥と同じことぢやないか、毎日〳〵面白くもない金糸鳥の番をして居て家から出ることも出來ないぢや、矢張り金糸鳥のやうに、君ももつと自由な廣い世界に飛び出して見たいと思ふだらう。」

「それも、左樣ですね。」

「そこだ。人間といふ奴は金を儲けに生れて來たのぢやない。動くといふことは、人間の持ち前の仕事だけれども、金を儲ける爲めに動く……即ち働くといふことは、人間の本能でも何でもない。下らない世の中の下らない人間どもが拵へたことぢやないか。お前も金糸鳥のやうに、その銀行を逃げ出してしまへ。そして俺と一緒に、自然の美しさに接して見ろ。」

「だつて、僕は銀行を逃げたら、喰はしてくれる者がありませんよ。」

「ところが人間は喰へないといふことはないのだ。生活して行くといふことは、天が生物に與へてくれた一大權利だ。見ろ！こんな雜草でも、矢張り延びの延びと繁つてるぢやないか。一匹の野兎でさへも、矢張り餓え死にもしないで、樂々と食つて行つてるぢやないか。……野原に來て見ろ。菓物は木の上にぶら下つて、ちやんと俺達が取りに來るのを待つてる。木の芽は柔かに吹き出して、俺達に取つて食べてくれと言つて居る。高いお金を出して買つたもの許りがいゝものぢやない。」

髪を延した男は、マイケルといつて、自分から世界第一の大金持だと威張つて居る。

「俺の財産といふものは、殆ど一文もないと言つてい、位だ。けれども俺は何もなくても、それで立派に滿足してるのだ。それで世界第一の大金持ちだ。世

間の奴等は何でも彼でも、金さへかき集めれば、それでいゝやうに思つて居る値段の高いものでありさへすれば、それが本統にいゝものだと思つて居る。例へば一月頃雪の下から取り出した筍は一本で一圓も二圓もするが、四月頃の筍は十錢の値打ちもない。けれどもその滋養分に於て、その味に於て、一體どれ丈の差があるのだ。却へつて四月頃延び〳〵と出來たのがいゝぢやないか。何事も金で割り出して行くこ、こんな大層な間違ひが出來上つて來る。……俺はそれが嫌ひなんだ。」

「……」

「世間の奴等は金の奴隷だ。齷齪してこつ〳〵金を蓄めてる奴も、又金を使ふことに工面をしてる奴も、皆金の奴隷ぢやないか。一生涯金の爲めに苦しめられて、切角人間を拵へてくれた大自然といふ恩人に叛いて居るのだ。自然は俺達を苦しめる爲めに、でつち上げてくれたのぢやない。俺達を同じやうに可愛

がらうこして生んでくれたのだ。自然の懷中に入れ。君もその穢はしい仕事を慶めてしまつて、俺こ一緒に自然の温い懷中に抱かれて見ろ。」

ゼリーはこう〳〵マイケルの言葉に、

「成る程」

こ感心してしまつた。そして

「僕も今日からお前さんの仲間に入れて下さい。」

と申し込んだ。

「さうか、君は偉い。近頃の人間どもには、稀に見る大人物だ。……では今日から僕と一緒に自然を友として暮さう。」

二人は握手した。

三　落ち行く先は

二人はかうして、仲よく、何の苦しみもなく、毎日々々樂しく暮して行つた籠から放されたゼリーは、金糸鳥のやうに、肩を延び〳〵と張らして、社長さんに叱られる心配も、金糸鳥に逃げられる心配もなくなつて、本統の樂天的な生活に這入ることが出來たが、その内に、又一人バロンといふ男が、二人の仲間に入れて貰ひたいと言つて來た。

そしてこのバロンは、ゼリーの從者のやうになつて働くことを希望して來たで、仲間は三人になつた。

三人は緣の葉の繁り合つた大木の木蔭に、枯草を敷き、お互ひに抱き合つて寢た。そして、朝は早くから起きて、代り代りに炊事の役を勤めることになつた。

ある朝——初夏の太陽が、燃え立つやうな緣の木蔭を斜にすかして下界い有樣を凝乎と眺めて居る時、——ゼリーは立木に鏡を立てかけて、久し振りに顎の髭を剪つて居る。マイケルは其處らから拾つて來たかさも思はれるやうな芋を鍋に入れて食事の仕度に忙しい。バロンだけは、ゼリーの上着を板鋏みにして置いて、その上に俯向けに寢そべつて居る。

「お前達は幸福な男だ。」

と太陽は東の空から、にこ〳〵笑ひ乍ら見て居るに違ひない。

恰度その頃、紐育財界の大立物ウキリアムが、自働車を驅つてこの林に這入つて來た。この男マイケルに言はせると一文の價値もない人間になつてしまふが、實は新聞賣子から叫き上げ、今では大紡績會社の社長として名聲を天下に

馳せ、眞に立志傳中の人物である。

ウキリアムは避暑の爲めに、この郊外の別莊に來て居たのだが、今日は平日よりも、暑さが激しいので、久し振りに水でも浴びて見たいといふ野心を起し一人で自働車を操つて、林の中の湖の邊にやつて來た。

湖といふと非常に仰山に聞えるけれども、實は周回十五六町位で、池の少し毛の生えた位のものである。が、周圍が林になつて居る爲めに、水は鏡のやうに溫順しくして居て、驚くほど綺麗だ。

「よく澄んで居るな。どれ一水浴びて、汗を流さう。」

ウキリアムは服を脱いで、無雜作に側の草の上に投げ出して置いて、いきなり水の中に飛び込んだ。

ゼリーはやつと顏を剪り終つて、さて何か惡戲をすることはないかと、四邊

をきよろきよろと見廻して居たが、軈て太陽も大分上の方に昇つて來るに從ひ怖さうな眼をむいて、じり〳〵と下界を睨み廻すので、暑さはだん〳〵激しくなつて、汗がじくじくと滲み出す。といふ有樣、

「自然もかう暑くしてくれちや困るな。」

こ漏し乍ら、林の中をぶら〳〵歩いて來ると、木の枝に一つの大きな蜂の巢がある。

「おや、こいつあ面白いぞ。一つ蜂の奴を弄かつてやらうかな。」

惡戲好きの彼は、こつそり蜂の巢の下へ忍び寄つて、竹片で目茶苦茶につゝき破つた。すると相手は常々から怒りつぽい蜂だから堪らない。

「この青二才め。生意氣なことをすると、ブン撲るぞ。」

と言つたか如何か知らぬが、兎に角

「皆して彼奴を酷めてやらう。」

と衆議一決したと見えて、お尻から磨ぎ澄した針を覗かせ乍ら、一齊にゼリーを襲つて來たので、流石のゼリーも大まご付きにまご付き、後をも見ずに、しどろもどろの退却といふ有樣。それはナポレオンのモスコー落ちや、平家の一の谷から遁れ[illegible]時のやうなお手軟らかなものではなく、何さま蜂軍の追及刻々に急な爲めに、頭を押へて草の上に轉び、木の根にしがみ付いて、目的もなく逃げて行つたが、落ち行く先は、壇の浦でもパリーの都でもなくて、林の中の湖の邊に出て來た。

ブン軍は群り立つて、彼の頭と言はず顏と言はず、取り圍いて、その鋭鋒を向けて來る。

「蜂君もう勘辨してくれないか。今度から彼麼惡戯は決してしないから……。」

ミ、平謝罪に謝罪つて見たが、それは馬の耳に風ではない蜂の耳に風で、とても聞えさうにもない。

暫く岸の所で躊躇して居たが、ブン軍の襲撃いよ〳〵猛烈となつたので、遂に意を決して、天にも地にもたつた一張羅の服を着たまゝ、ざんぶと許り身を躍らして湖の中に飛び込んでしまつた。

かうして、やつと蜂の襲撃からは遁れたやうなものゝ、心殘りなのは一張羅の服で、

「こいつを乾すまでは、着るものもない。」

ミ考へると、全く心細くなつてしまふ。

「でも、早く上つて、日のかん〳〵照つてる間に、乾かしてしまはねばならぬ。」

と、兎に角向ふ岸に登つて來た。

「おや〳〵、大變なことをしてしまつた。蜂（罪）の報ひといふのはこのことだらう。」

こ洒落る勇氣もなく、上着を搾つて居ると、ふと足下に綺麗な一着の服が脱いであるのを見出した。

「おや……これは又素晴らしい上等の服ぢやないか。」

取り上げで見ると、どうやら自分の身體に合ひさう。

「さうだ。こいつは、自然が僕に惠んでくれたのに違ひない。兎に角着て見よう。」

こ、早速濡れた自分の服を脱ぎ捨てゝ、その服に着替へて見るこ、如何にも自分の身體にしつくり合ふ。こても中古や借着とは思はれさうにもない。

「こいつは有難い、第一僕の身體にしつくりと合ふこころが妙だ。それに型は新式だし、ものは上等の駱駝と來て居る。こいつあ有り難い。」

ゼリーは大喜びで、懐中に手を突つ込んで見るこ、中には立流な紙入があつて、ウキリアム・ハーグレーヴ・バチエラーと記した仰山な名刺があつた。

「こいつあ、いよ〳〵大變だ。ウキリアム・ハーグレーヴ・バチエラーこいへば、紡績界の大立物——どうだ僕がこの服を着て、堂々と歩くと、世間の奴等はウキリアムこ見間違へるに相違ない。」

四　紡績界の重鎮

ゼリーはウキリアムの服を着て、「我こそは紡績界の大親玉なり」と言はん許りに、大威張りでやつて來るこ、道の傍に一臺の自働車がある。これはウキリアムが乘り捨てゝ置いたものであつたが、彼は如何にも自分のものかのやうに、いきなりその自働車に乘つて、把手を持つて見たが、何處かに故障がある こ見えて、如何しても動かない。

すると、恰度そこへ、四人連れの避暑客が一臺の自働車に乘つてやつて來たそれは、グロッスマン將軍といふ猛烈な自働車狂と、その娘の快活で恰悧で

美しいルイズと、それからウキリアムの向ふを張らうといふ大變な財界の大立物バーレットと、その娘のビリーこの四人であつた、が、ルイズは早くもゼリーの困り顔を見て、聲を掛け、自働車を停めて、走り寄つて來た。

「貴方は何か困つて居るこゝでもあるのですか。」

彼女は目をぱち〳〵させ乍ら、首を傾けて聞いた。

「……」

ゼリーは餘りの突然さに、しかもその娘の餘りの美しい顔に、ごきつこ胸を突かれて、默つたまゝ、きよとんとルイズの顔を見守つた。

「だつて、貴方のお顔の額には、さも困つたらしい當惑皺が何本も何本も寄つて居ますわ。」

「さう……自働車が動かないやうになつてしまつたので、困つてるんです。」

「自働車……おやさうですか、妾はお父さまが自働車狂なものですから、よく

數はつて知つて居ますわ。どれ妾に見せて下さいな。」

彼女はさも馴れ〳〵しさうに、かう言つて、いろ〳〵自働車の機械をひねくり廻して居たが、軈てよくなつたと見えて、

「さあ、もう大丈夫ですわ。」

ゼリーは氣まり惡さうに見て居たが、大の男が困つた揚句、女に直して貰つて置いて、

「さうですか、それは有難う。」

と、言ひ放しで逃げるといふことは、如何にも見識がなさ過ぎる。何かかう大見えを切るといふやうな材料はないものかこ考へて居たが、軈て

「さうだ、ある〳〵。この名刺を見せてやるに限る。」

こ思ひ出したので、

「ごうも有り難うございます。私はこんな者ですが、以後よろしく御交際を願

ひます。」

と、さも無雜作らしくウキリアムの名刺を取り出して渡した。内心、

「驚くだらう。」

と思つて居ると、案の條ルイズは名刺を凝乎と見て居たが、軈て、

「おや、貴方があの有名なウキリアムさんでしたか。それとは少しも存じませんでしたわ。」

と喫驚したやうな目付きで名刺とゼリーの顏とを、繰り返へし繰り返へし見比べ出した。流石のゼリーも腋下を擽られるやうな氣がしたが、

「うか〳〵赤い顏でもして、見破られては大變。」

と、面の皮を十倍にも二十倍にも厚くして、

「えゝ……さうなんです。」

と平然たる有樣。

「實は彼處に私の父とお友達とが居ますから、お急ぎで御座いませんでしたら、一寸お會ひ下さい。」

ルイズはすかさず、彼を案内する。

「乘り出した船なら仕方がない。ウキリアムで遣り通してしまへ。」

ゼリーは腹の中で、かう決めて、娘の導くまゝに從いて行つた。

五　尻尾の出ぬ内

ゼリーは俄かに大金持となつてルイズに紹介された。ルイズの父のグロスマン將軍も驚いたが、バーレットは猶ほ更驚いた。

「これは驚きました。貴方があのウキリアムさんでしたか。兼ね〳〵お噂は承つて居ましたが、お會ひするのは今日が始めて……これを機會に何卒末永く御交際を願ひます。」

バーレットは手を古摺り乍ら、頻にゼリーの御機嫌伺ひをやり出した。彼は財界の狸親父と謂はれて居るだけに、遣り手には違ひないが、それだけに狡猾な男で、金持の顔を見ると、直ぐ親密な交際をするやうに巧らんで、遂には自分の持つて居る株を、有望らしく話し掛けてうんと高値に賣り付けやうとするのが、その手癖で、中々以て隅には置けぬ男である。

で、いろ〳〵とお定まりの世間話しが、一通り段落をつけると、

「如何でせう。若しお暇でしたら、この向ふの山の方に私の別荘があるのですが、其處へ御案内申し上げたいと思つて居ます。」

とゼリーの顔色を窺つた。

「しかしお邪魔になつてもいけませんからな。」

ゼリーは體よく逃げやうとしたが、バーレットは中々離さうとしない。

「いや如何致しまして、私共の別荘は、何時も空いて居るのですから、穢し

い家では御座いますが、是非御案内申し上げたいのです。」

「では、お供いたしませう。」

ゼリー先生、尻尾を捉へられない内に、こそ〳〵と逃げ出せばよかつたが、如何にも斯様にも、斷りやうがなかつたので、こう〳〵承知してしまつた。

そこで同勢五人、早速自働車を驅つて山荘へと向つた。自働車の中で、ゼリーはいろ〳〵と考へた。相手が何しろ財界には可成辣腕家として聞えて居るだけに、うかうかすると化物の正體を握られるやうなことが出來るかも知れない。成る可くなら、襤褸を出さぬ内に、その豫防法を講じて置かねばならない。……と様々に頭を碎いて考へた末、

「貴方の別荘に居る間は、お互ひに商賣のことは一口も話さないといふことを約束して戴きたいのですが……何しろ避暑に來て居るのですから、悠然頭の洗濯するのが、その最大目的で、商賣の話をすると、折角の避暑が目茶苦茶にな

つてしまふ眞れがあるのです。」

と言ひ出した。

「よく判りました。では海の別莊では、決して商賣の話はしないと斯樣定めるここに致しませう。」

とバーレットも早速同意してくれたので、ゼリーのウキリアム先づこれで一安心。

ところが此處に容易ならぬ一大事が出來したといふのは、眞物のウキリアムが、散々に水を浴びて、

「これですつかり汗を流してしまつた。さ歸へらう。」

と、岸の上に登つて見ると、先刻脱ぎ捨て、置いた服がない。

「何か自分の考へ違ひぢやないかしら。」

さ猶ほも四邊を見廻すと、其處には餘り上等でない一着の服が脱ぎ捨てゝあるそれはゼリーの置いて行つた服であるが、暑い日のことだから、何時の間にかもう乾てしまつて、着るには少しも差支はなかつた。

「誰か服を取り違へて行つたのに違ひない。しかし取り違へるとすると、隨分暢氣な無頓着な男だらうな。」

彼は大金持だけに、服の一着位には餘り騷がなかつた。

「でも恰度こゝに一着の服が置いてあるのだから、これを當分着て居よう。」

と、ゼリーの服をすつぽりと着た。しかし暫くしてから彼は自分の服の懷中に紙入を入れて置いたことを思ひ出して來た。

「さうだ。彼奴を持つて行かれては、一寸仕事に差支へる。……たつた先刻のことだから、まだ遠くへは行かないだらう。どれ追つかけて見よう。」

とウキリアムは、急いで自働車の方へと向つた。

六　折角の狂言も

山の別荘ではバーレットが、無一文のゼリーを大金持のウキリアムと許り思ひ込んで居るので、この機逸すべからずと、一儲けも二儲けもする考へで、大いに奸策を廻らして居る。しかし相手のゼリー先生、そんなことは我關せず焉と、圖々しい程平氣なもので、ルイズと遊び戯れて居る。

ところが、恰度其處へ眞物のウキリアムが、如何見當を付けて來たのか、ぶらりと舞ひ込んだ。そして自分の服を着て濟し込んで居るゼリーを見付けた。

「おい。これは君の服ですか……」

ウキリアムは誰も居ない所へゼリーを呼んで、こつそりと聞いて見た。

「いえ、これは湖の邊りで拾つたのですが……」

二人が話をして居る時、一人の給仕がバーレットの所へやつて來て、此處で

はウキリアムを欺して一儲けしやうといふ相談を始め出した。

神經の鋭敏な眞物のウキリアムは、早速バーレットの奸策を見て取つた。そしてこの奸策の裏を掻いてやらうと考へたので、

「それは僕の服ですが、今暫く着て居て下さい。そして、今暫くウキリアムで居て下さい。」

とゼリーに向つて言ひ出した。

「それは又如何した譯です。」

「實はバーレットが僕を欺して、金を儲けようと考へて居るらしいから、その計企の裏を掻いてやるのです。」

と説明されて、茶目式のゼリーは、

「そいつは面白い。承知しました。」

と直ちに大賛成をしてしまつた。

こちらは樂天生活の主唱者マイケルと、ゼリーの從者となつて居たバロンである。二人は何時の間にかゼーリが見えなくなつたまゝ、一日も二日も歸へつて來ないので、そろ〳〵心配し出した。

「まさか山犬に喰はれたのでもあるまい。」

と二人は方々を捜して、やつと彼がバーレットの山莊にウキリアムに成り濟して這入り込んで居るといふことが知れ、

「兎に角勸告して連れて歸へるがいゝだらう。」

といふので、二人連れで山莊に乘り込んだが、そこには恰度バーレットの給仕が居たので、彼はウキリアムを連れて行かれた日には、折角今迄の苦心も、水の泡になつてしまふと、大いに抵抗することになつて、此處に端なくも大格鬪を演ずるといふ有樣、ゼリーも亦、今引き歸へされたでは、ウ井リアムから賴

まれた折角の狂言が、まだ序幕の内に、目茶苦茶になつてしまふので、極力給仕に加勢して、二人をこう〳〵押し入れの中に叩き込んでしまつた。

恰度そのどさくさの眞最中に、又一人ゼリーを尋ねてやつて來た男がある。この男は紐育の探偵で、もとゼリーが勤めて居た銀行から賴まれて來たのである。銀行では頭取が遂に老年の故か、病を得て死んでしまつたが、その遺言狀には

「この銀行及び其附屬の財産は、凡て最も正直で最も勤勉に働いてくれたゼリーに與へる。」

といふことが書いてあつたので、社員一同は開いた口が塞がらず、

「人もあらうに、あの暢氣者のゼリーに、この銀行を渡すとは、頭取さんも餘程の變り者だな。」

と言つても見たが、死人に物は言へないので、その遺言狀を取り消して貰ふ譯

にも行かなかつた。さてこそ探偵を頼んでゼリー捜索を始めたのである。

七　いよいよ本物

ところがこの探偵さん、

「ゼリーの奴、この遺言狀を見せれば、大喜びで歸へつて來るに違ひない。」

と呑み込んで、うか〳〵とバーレットの家の表口から這入り込んだので、バーレットの給仕共は、

「又一人邪魔者が來たな。」

と感違ひをしてしまひ、再び格闘の末、これ亦押入れの中に叩き込んだ。

そこでバーレット先生、まだ會社が成立もしないのに、市場で煽り上げた持ち株を、すつかりウ井リアムに賣り付けてやらうと、ゼリーを例の巧妙なる口振りを以て、旨々と解き立てた。しかしゼリーの方では、

「成る程。……成る程。」

と、さも尤もらしく一々聞いて居たが、聽ての程に押入れの中にじたばたして居た探偵やマイケルや、從者の面々遂に扉を破つて流れ出でた。

「おい、ゼリーさん、もう宣加減に化の皮を剝いだ方がいゝよ。」

マイケルは先づ言つた。

「お前さんをウ井リアムだと思つてるのは、そのバーレットさんだけなんだから……」

從者も言つた。

そこで流石のゼリーも、こう〳〵尻尾を捲いて、

「實は……」

と白狀し出した。そして眞物のウキリアムとバーレットとを仲直りさして、こゝに芽出度く握手させることになつた。

「さうですか……これはどうも……」

流石辣腕家の聞え高かつたバレット先生、年若かなゼリー君にすつかり欺されて居たといふことが解つて、大いに恥らひ乍ら、禿頭をつるりと後に撫でた。ウ井リアムは後の方から、

「あはゝゝゝゝ」

と大笑ひに笑つて居る。

そこへ探偵が出て來て、さも勿體らしく遺言狀を懷中から取り出して讀み上げた。

「ではゼリーさんは、紡績會社の社長ではなくて、大銀行の頭取か。」

とバーレットは笑つた。

「有り難い、いよ〳〵眞物ですな。」

ゼリーも喜こんだ。皆はこの不思議な幸福者ゼリーの爲めに祝盃を擧げることになつた。

＊　＊　＊

その後ゼリー君はグロッスマン將軍の愛孃ルイズさんと、芽出度く結婚の式を擧げて、元の銀行に、今度は金糸鳥の番人ではなく、最も自由な頭取の椅子に腰を下すことになつた。が、マイケルとバロンとは、相變らず、平和な野に樂天的の生活を續けて居る。

（完）

出たり
這入たり

出たり這入つたり

一　平和の御祈禱

一體俺達人間は、戰ふべきか、べきでないか。べきであるのも、べきでないのも、物は理屈のつけ様で、こいつは中々考物だぜ。石が流れて、木の葉の沈む浮世だもの。此んな問題を提出した時、平和論者は直ちに言ふ「戰爭は、我々人類の敵である。其の生命を奪ひ、其の幸福を奪ひ、得る所は悲慘な血の跡を、有形に無形に殘して呉れるのみ」と。成る程聞いて見れば尤も至極。今度は戰爭論者が腕捲りをして云ふ「俺達アちいよ〳〵喧嘩はやるんだが、隨分仲は好いんだぞ、貴樣達の樣に、顏でばかり好い樣に胡魔化して置いて、心の中で睨み合つて居ることは嫌ひなんだ。況や戰爭は世界の文明を進め、人心の

腐れかゝつたのを、燒き直しするのだぞ」と。成る程聞いて見れば、之れも亦御尤も千萬。

所で玆はヂエルシーの教會堂、澤山の平和論者が、ウヨ〳〵と集つた。

「諸君よ、平和を熱愛せよ。平和は我々の詩である、藝術である、極樂である諸君よ、平和を熱望せよ。平和は心靜かなる者に、祝福を授けるのである。アーメン〳〵」

其の中の一人が、糸の切れかゝつたヴィオリンの樣な聲で演說をすると、皆の者は贊成の拍手をした。そして一同顴額のあたりを、妙な恰好にかう指先で押へて、丁度申し合せて頭痛をおッ始めた樣な手附をしながら、眼を瞑つて伏した。中には、眼病で御座いと云つた風に、眼に蓋をして居るのもある。

廣い會堂の中は森閑として、時々流行性感冒らしい咳の音がするばかり。その中で、厭に痛高な聲が響く。

「おゝ神よ、平和論者の上に祝福あれ！」

其の時天國から神樣が、「あゝよし〳〵承知した」と云つたか、其れとも向ふを向いて舌を出したか、チト遠方だつたので見えなかつた。が、此の時、丁度此の時、天地を振はせた大音響が響いた、いや轟いた、いや爆發した。「どがーんー。」

其の轟きは、頭痛持達の顴額に響いたばかりでなく、切れかゝつた糸のヴィオリン聲の者の、耳を破つたばかりでなく、壇上に掛かつて居た。紙張りの額まで落ちた。落ちた紙張りの其の枠は、司令者の頭を通じて、肩から腰へ斜に懸つた。「平和の上に祝福あれ」ミゴヂック風に書いた、鹿爪らしい字が、切れ切れになつてもまだ、ひら〳〵と動いてゐる。人々は言ふ

「おゝ平和よ、おゝ平和よ。」

平和は今爆發した。空を覆ふた土煙……

「爆發のまあ、何と云ふ怖ろしいことでせう。」

司會者は、額の肩掛のまゝヴイオリン聲で叫んだ。

「靜かに、諸君よ、心を合せて靜かにせられよ。」

平和だ、平和だ。平和に限る。天長地久穩かであれ、永久に平和であれ。群衆は又靜かに顆顆を押へる。

「したが、今の音は一體何でせう」

ぐるりと廻りを見たけれども、平和論者の人々は、一人も之を知らなかつた。大方、眞理よりほか知らぬ、天の神樣が、一寸惡戯をしたのでがな御座らう。

二　可愛い金絲鳥

快青年のテッディ君、愉快さうに歩いてゐる。歩くと言ふよりも、ダンスの

行進を續けて居る。高い煉瓦壁の上には、蔦蔓が暢氣さうに匍ひまはつて、可愛い、白い花が、暖かなふつくりした、乙女の肌の樣な春の風に吹かれて、思ひ出したやうに「お出で〳〵」をする。

空は眞蒼、新しいインキの樣に光つてゐる。慈母の樣なお日樣が、ニコ〳〵する度毎に、軟かな軟かな光線を投げて、ずーつと下界を撫で廻して行く。其の光線が、蔦蔓の花を撫でゝ、煉瓦壁を撫でゝ、道路を撫でゝ、今衣嚢に手を突込んで歩いて行く快青年の顏を撫でた。ニテッディの唇が圓く弓形に廣がつて、白い齒がニーッと見える。微笑つてゐるのだ、眞から嬉しさうに。テッディ君、君は一體全體何がそんなに嬉しのだ。徒に問ふことを止めよだ、僕もやはり青年だよ。暖かな春の時代だよ。僕には僕の樂しい樂しいものがある。もつて何だい、ものつて？　再び唇が圓く開いて、白い齒がニーッと出る。青春の血に燃えた頃じやないか、大てい想像をしろ。愛し愛しと言ふ心じやな

いか！　序に名前も聞かさうか。

アモス・ゼニングス氏の令孃。彼の女は美しい金絲鳥の樣に可愛い〻、綺麗な駒鳥の如く愛くるしい。それは丁度薔薇の笑つた時の樣で、薫の思ひに惱む時の樣で、そして……何と言はう？　僕は文士じやないから、適切な形容を知らないよ。其の金絲鳥に會ひに行く、野薔薇の笑顏が見たいのだ。其の駒鳥に會つて來る、薫の鬱いだ顏つきも、やはり詩だよ、歌だよ、哲學だよ。

と、其の時だ。天と地を引つくり返した樣な大音響がした。爆發々々！　赤い煉瓦壁は崩れる、笑つてゐた白い花は飛ぶ、空が濁つて土煙が立つ。快青年の笑顏が見えぬ。可愛さうにテッディ君、行年正に何十四歳、可愛い〻人を後に殘して、見えなくなつて了つたのだ。

しかし、煙が逃げて土煙が落ちついた時、土に碎けた煉瓦の間から、テッディ君は面を出した。

「一體何だい。今のは？　アハ〻、蓋し痛快だ。愉快々々」

三　頭をふる花

時は一千九百十六年、所はジェルシーの食料品製造會社。其のクリーム工場の一つが爆發した。

クリームにしては餘り藥が利き過ぎて居る。思ひ切つて飛び上つたものだ。天に冲してやがて大地へ落ちて來たものは、鍼力鑵の甘露の雨では無かつた。銀色の鉢卷をした、十二吋三十五瑚の砲彈である。小さいのは銃丸である。歴史家は大切に記錄して置くがい〻、一千九百十六年頃の食料品は、正に鐵であり硝石であり硫黄であつたことを。食料品とは上つ面の假の名だ。

時は世界の國際的危機、歐洲の一ケ所に煙草の吸殼か落ちた時だ。火元の獨逸が燃え上つて、近所も盛に火の手を上げた時だ、早く消し止めないと、遠く

東洋や米國へまで飛火がするだらう。消し止めるには硝石が入る、彈丸が入る一握の硝石も、一と粒の銃丸も、無駄には出來ぬ。其れが爆發して降つて來ただが飛び上つた景色は痛快であつた。青年は獨り面白がつて居る。

テッディはゼニングスの屋敷へ飛込んで來た。

「痛快でしたなあ。愉快ですなあ」

其の飛び込んだ室の中は落花狼藉、爆發は此室をも撫でたらしい。銅像は横に寢ころんで、仆れた、花瓶を枕にして居る。枕こ言つても餘り飛び離れて居る。滿足に立つて居るものは生きた人間ばかり、其の中の主人は、掛け釘を外れた天使奉迎の額を支へて居る。

「痛快ですな、アハヽヽヽ」

併し主人のアモスは答へなかつた。おゝ其處にはわが金絲鳥の令孃が居る。研娟として又悠然たりだ。テッディ青年は其の傍へ駈けよつた。

「痛快でしたな、實に、アハヽヽヽ」

今日も野薔薇の笑顔が見たかつた。けれど可哀想にテッディよ、彼の女も平和が好きだつた。最愛のわが戀人は白い眼をしてぢろりこ見た。今まで會つて見たこゝの無い目つきに、快青年も一寸しよげた。

「諾にや、爆發は俺は嫌ひぢや！　俺が娘は平和を愛する青年で無ければ、上げるわけには參りません」

年老ひし戀人の父は、白髮頭を振り立てゝ云つた。

「私、爆發なんか大嫌ひなのよ、私平和を愛さない方こ、結婚する譯には參りません」

あゝ、思ひに思つて會ひに來た、わが戀人の言葉はかうである。白眼冷笑。然し平和とは何だ？　人道に刃向ふものはゝべてわが敵だ。傷つた平靜、傷ついそれが平和か。眞の平和はどうして求められるのだ？　戰爭、爆發、轟然たる

大音響、何と痛快なことではないか。

丁度此の時、入口の扉が開いて、手に美しい花束を捧げた、一人の下男が這入つて來た。

「平和論者、パンチト樣からでございまする」

「お、爺や、何と云ふ美しい花だらうね。何といふ平和なことだらうね」

令孃は其の花束を掻抱いて頰ずりをした。そして一番大きな白い花には接吻をした。と、やがて細長い平和論者の姿が現れた。

「さあ、何卒、お掛け下さいませ。只今は平和の花を……」

彼の女はニッコと笑ふ。優遇、歡待、微笑——同じ笑顔でも今日の笑顔は、俺に見せる爲の笑顔では無い。令孃は向ふを向いて居る。俺の居るのさへ知らぬらしい。

「見ろ！」

テッディは飛び出したのである。

四　自暴自棄

女だ、女だ、呪ふべき奴は女だ。だが俺の腦は苦しい。崩れた壁の所まで來た。見よこの壁を。つい今しがたまで、靜かに樂しく夢の如く、春の日の中に咲いて居た。あの可憐な白い花が、今は微塵に碎けて居る。お、花よ、お前は死んだ。壁が倒れる時、一つしよに抱きついたまゝで死んだ。花やお前に聞いて見る、戀と言ふものは樂しい時ばかりのものか、爆發の音と共に消えて無くなるものか。それとも縱令殺されても、戀は命に代へられぬものか。お、左樣か、お前は碎けた煉瓦の死屍に、未だ蔓の手を卷きつけて居る！。

あ、俺は爆發をする。苦しい。俺を爆發させたものは女だ、女だ、女だ、女は呪ふべきかな。よし、自暴になれ、爆發をしろ、荒れ廻つてやれ。テッディ

は衣嚢からノートを出して、白い頁を引き拗つた。

僕は自暴自棄になりました。

僕のすることに責任はありません

脚下を見ると、其處に小さな砲彈が落ちて居る。

よし、テッディは拾ひ上げて、その中へ紙片を捻り込んだ。發止！　喊ひは誤たない、彼は野球の選手である。彈丸はゼニングスの窓を破つて、飛び込んで床へ落ちた。三人の平和論者は仰天した。又爆發？　けれども其の音は以前よりは小さかつたので、ほつと胸をなで下した。そして青年の手紙を讀んだ時、親子は顔見合せて云つた。

「これだから平和論者に限ります」

バンチトは令孃の腕を把つて、熱い接吻を手の甲にする。令孃は其の爲すまゝに任せてゐた。

テッディはブラ〳〵街の方まで來た。だが口惜しい、悲しい、恨めしい。苦し紛れだ、自暴くそだ。えゝ何うにでもなれ、酒だ、酒だ。併し今日は禁酒日である。

「なあに宜いさ、竊そりと、いゝか、賴んだぜ」

テッディは居酒屋へ飛び込んだ時、其處の主人にかう云つた。叱！　こ主人は唇に指を當てゝ、そして其中の一本を伸べた。

「ぢや一つだけ、後は無しですよ」

「健康を祝するんだ、爺さんも一杯、何構ふもんか、さあ盃を上げて」

カチツ！　一杯の筈の盃は、何べんも鳴つた。ごうせ自暴くそだもの。と、其の時テッディは泣いた。あゝこれが彼の女の盃であつたならば……

「爺さん、聞いてくれ、かうなんだ」

俺はこれから、女といふ女を呪ふ。彼奴は魔物だ、悔るべき危險火藥だ、俺

を爆發させた。女ごいふ奴は、數萬の男を粉碎にするんだ、女め、此の世から消え失せろ。

「お、爺さん、お前も贅沢して奥れるのかい……」

壁には廣告のビラがある。嬌笑は春の宵の如く價千金。心搖か、彼の女の顏ごも見える。

「あれが不可い、あれが火藥だ」

攻擊しろ、踏み潰せ、呪ひ殺せ。テッディの傍には鷄卵が堆く積んであつた。彼は其の一つをこつた、發止！ 卵は飛んで描かれた脂粉の顏に當つて、あざ笑つた樣にべタ〳〵と碎ける。痛快だ、やッつけろ。主人も亦上機嫌である。

五 悲鳴の聲

食品工場の爆發問題は、實に容易ならざる大事件である。クーリムならまだしも、國民の血こ涙とに代へた鐵と火藥、其れを爆發させた如は賣國の徒だ獨探だ、それで無くば何だらう。兎に角由々しき大問題である。

ジエルシーの警察署長は、頻りに天の一方を睨んで瀏息をついて居る。天われへ力を藉せ、わしは[illegible]にして[illegible]がたない。座して此の大事を見る、人よわが苦衷を察するか。

腹心の部下に一探偵がある。彼を署長は督勵した。併しこれといふ目立つた功績も上らぬ。今日も探偵は命を承けて飛び出した。天網恢々疎にして洩さず今に見よ見よ、俺の腕で犯人を捕縛して見せる。彼は街上を行く、夜も大分更けた樣子で、軒端の月影も傾いた。こ一人の細長い男が歩いてゐる。彼が怪しい、よし後から尾行してやれ。

やがて細長い男は、こある居酒屋の前で立ち止つた。少し何か考へて居たが

やがて其の家へ這入つて行つた。がら〳〵、忽ちにして混亂の響、投物をげる音、悲鳴の聲、すは――こ探偵か馳せつけた時、細長い男は眉間を破られて顔を眞紅にして居た。傍にはビール瓶が二つに破れて落ちて居る。發止、發止、止、手に持つたのは鷄卵だ、又一つ細長い男の顔に當つた。青年こ爺さんこは腹を抱へて笑つて居る。併し相手も男だ「何をするか」と立ち上つた。そして青年に摑み掛かつた、が丁度心太を尺八に叩きつけた樣に、ひよろ〳〵とかしこまつて了つた。お爺さんの手が動く、發止、又一つ顔に當つた。顔一面が黃色になつて、黃粉餅の看板に持つて來いだこ、二人は又一としきり、腹を抱へて笑ふ。

何だ、何者の騷ぎだ。窓からのぞき込んだ探偵の眼が光る。うむ、あの傍若無人の青年が怪しい。第一眼の光が唯の奴とは思はれぬ。さては此の家を隱れ家にして、惡事を企てる奴に違ひない。萬一するこ爆發事件に關係した奴かも

知れぬ。うむさうだ、あの洋服を見よ、肩から背にかけて土のついた跡がある氣のせいかも知らぬが、さつき「爆發」とか「危險火藥」とか話して居たのも確かに此の家の中であつた。

「待て！」

探偵は躍りこんだ。

「貴樣の名は何と言ふ」

「俺の名？　テッディ……一名自暴自棄と云ふ」

探偵は益々怒つた。こいつ人を馬鹿にして居る。

「君の名は何と云ふ」

「パンチトと申します、平和論者の一人です」

「平和論者？　宜ろしい、兎に角一應お歸りなさい」

「平和が何だ、弱虫めが、爆發の痛快な味を知らぬか、今日も……」

「こらつ！　同行せい」

其の夜青年は、始めて留置場といふ所で寢て見た。

六　まことの戀

東の窓からお日樣がさし込んで、テッディの顏をなでた。

「アヽー、アあゝいゝ心持で寢た。何だ此處は、妙な所だな、うんさうだ、昨夜はたしかに痛快だつた。自暴自棄の第一日、平和論者の一人、然かも戀敵のパンチトを擲つてやつた」、青年は又一つ大きな欠伸をして、眞から愉快さうにニッコとした「いや實際痛快だつた、いゝ日記だ！。が併し、其の第二日がこんな場所では、チト面白くないな。が、兎に角、旦那のお目覺めと御座らうか……」

寢返りを一つして、さて起き上らうとした時に、眼に入つたものがある「女

だ！　女が居る！」

「お目覺めになりまして？」

何時來たのだらう、何時頃から僕の起きるのを待つてゐたのだらう。女は嫣然して傍へ寄つて來た。「叱！　叱！　寄るな〳〵、女、魔物、爆發藥、危險だ呪へ、だがよく見ると可愛らしい、親切さうな女だ。」

「まあ血が、大變ですわ、お怪我をなすつたの？　お傷はしいこと、私繃帶をして上げませうね」

慇懃にして叮嚀である。情味の溢れる樣な親切とはこれだらう、テッディも多少心を許した。

「有難う、昨晩は痛快だつたんです、實に」

女は此處の署長の娘だつた、急いで出て行つたかと思ふと、間も無く雪の樣な眞白な、新しい繃帶を持つて來た。

「さ、巻いて上げませう。下手な看護婦ですよ、まだ馴れませんので、ホヽヽ、」

身を近くすり寄せて、手に繃帶を巻き始めた。餘り軟らかな手で巻かれるので、何だかくすぐつたい。青年も何時か微笑した。

「昨晩は隨分暴れ廻つてやつたんです。平和論者の或る奴を、ひどい目に合はせてやつたんです。いや思ひ出しても腕が鳴る！　痛快、萬歳ッ！」

「あら、そんなに動いては、繃帶が巻けないじやありませんか？　でもあなたはお強さうね、男は時と場合では、少しは花々しい亂暴も出來ませんこねー」

これが女だ、本當の女だ、何こ言ふ可愛いことを言ふ「男は時こ場合によつては」とはすつかり氣に入つた。「花々しい亂暴」とは面白い。眞の女だ、味方だ」

「どうも有り難う」

繃帶を巻き終つた手に接吻してやつた。此の如き女は決して危險なものでは無い、爆發物では無い、嘘だと思つたら、僕はどんな保險にでも附けて見せる。こんな女は爆發物どころか、キャラメルの樣に甘いものである。斯の如き女を愛せよ。

此の日、テッディは法廷に引き出された。願はくはわれをして、この牢獄より出さしむること勿れ、此處には親切なジャニーさんが居る。

彼は三十日の宣告を受けた。

「有難う」

飛び上つて裁判官に握手を求めた。まあ何こ云ふ風變りな男だ。裁判官の面喰つたのも無理は無い。

樂しい獄屋の生活よ、壁は温く、風は匂やかに、天井は明るい。さうしてわがジャニーさんは、日毎に自分を訪れてくれる。

花を挿して呉れる。綺麗な繪額、塵一つない箒き掃除、これが本當の親切といふものだ。それから優しい聲で唄つて呉れる。マンドリンの可愛い、調律！銀鈴を振る様な其の聲には、野越へ山越へてふは〳〵と、天國に遊ぶ時もある谷を出初めた鶯が、始めて此處へ訪れたかと思つたこともあつた。おゝ鶯の精！　何といふよい聲だらう。楽しい、愉快だ。だが思ひ出す度に不快なことが一つある。此處に居るのは三十日の間だ、三十日過ぎたら、又追ひ出されねばならぬ。あゝつまらない、一生涯此處に居たい。

七　放　免

署長の部下のかの探偵は、此の頃令孃の素振の常でないことに氣がついた。若しや誰か戀人でも出來たのでは有るまいか？　自分がかうして、中風の署長の命を、温順に聞いて居るのは何の爲だ。みんなあの令孃の爲ではないか。さ

うだ、時遲れては臍を嚙むとも、痛いばかりで後へは返らぬ。第一あの令孃を人に取られたと有つては、此の名探偵の體面に毛が生えるではないか。さうだ決斷は早きを以て貴しとなす。

或る日探偵は、署長の前に進み出た。

「お孃樣を、是非私の愛妻として、申受けたうございますが……」

「馬鹿ッ！」中風の署長はピク〳〵と足を震はした「大切な爆發犯人を挿へて來い。女のこゝなぞそれからだ。國家の重大事件が、貴樣の雙肩に掛かつて居るのだぞ」

よし、犯人逮捕、結婚はそれからだと云つた。草を分けて、石を起して、天に走り地を潜つても、屹度犯人を逮捕すれば、それから結婚、おゝさうだ。だが怪しいのは、あの十二號室の犯人だ。證據不十分とあつて、僅か三十日の拘留で聞いたが、俺の睨んだ所では、犯人は屹度あ奴に違ひない。現に爆發は痛

快でたまらぬとぬかした。さうだ今日は俺が、獄屋へ行つて白狀させてやらう」

探偵は獄屋へやつて來た、十三號室の前に立つて、そつと中の樣子を窺へば

あら不思議やな、銀鈴を振る女の唄、それは紛ふ方なきお孃さん。

「あつ、不可い！　彼奴は早速放免してしまふことだ」

それにしてもお孃さん、何故わざ〳〵、こんな恐ろしい獄屋にまで遊びに來るんだらう。まだ子供だと思つて居たのに、若しや二人が戀に落ちて居るのぢやあるまいか。俺の職業は探偵だ、よし見屆けてやれ。

いよ〳〵以つて不可い。それお孃さんが膝に手を乘せた。あれ〳〵〳〵手に接吻をする。大變々々！、　此の國中の火藥庫が、一時に爆發しても、俺は斯まうで驚かない。さあ大變、このまゝにしては置かれないぞ。

探偵は再び署長の前へ進み出た。

「十三號室の犯人は、唯に改悛の情著しきのみならず、心神喪失、動もすれば自殺でもして仕舞ふかの樣に見受けられます。一時も早く御放免を……」

「よし、放免をしろ」

「やめた！」

「なにッ？」

「いゝえ……」

彼は飛ぶ樣に、踊る樣にして、十三號室へやつて來た。

「出ろ！」

「何だ？」

「放免だ」

「まだ十日殘つて居る」

テッディは動かない。

「命令だぞ」

「併し三十日と云ふのも命令だ」

「俺の方の命令が新らしい、今日出たホヤ〳〵の命令だぞ！」

殘り惜しい。まだ二十日しか經つてゐない。然かも俺には二日三日としか思へないのだ。それなのに、この探偵は、まあ何といふ沒曉漢だ！

可哀想にテッディは追出された。開けられた鐵門はまた閉ぢる。這入らうにも、もう術が無い。あゝもう一度這入りたい。が鐵の門は堅かつた、押しても突いても開かばこそ、せめてはジャニーにもう一度、かう思つて窓に攀ぢ上つた。そして鉢に植はつてゐた白薔薇を、拐つては束にして名を呼んだ。が出て來たのは中氣の署長である。

「誰れ、何時まで愚圖々々して居るのだ。娘は前科者には用は無い！」

八　五十哩の速力

戀し、懐し、獄屋の夢よ。夢よ夢、昔を今になすよしもがな。なぜお前はもう一度、夜毎に私の眼には現れぬ。俺はもう一度、あの獄屋に歸り度い。歸つてもう一度、あの驚の唄が聞き度い。はて何としたものであらう。獄屋に戻れる名策は無いか。俺には中々の大問題だ。

何でもいゝ、咎められて、捕まつて、さて投込まれゝばそれでよい。さうだ

會つて咎められる方法を聞いたことがある、今日は實行だ〳〵。

テッデーは自働車に乘ると、一直線に街中を走り出した。と丁度交通監督が一三本ある鬚を捻りながら、手を擧げたり下げたりしてやつて居る。其の前へ車を止めた。

「お廻りさん、これ位の速力では、違反にはならぬものでせうかなあ」

ハンドルに手が掛るや否や、やあ駛らせた駛らせた。家も飛ぶ街も飛ぶ、森も飛ぶ山も飛ぶ。一氣に、一氣に。やがて車の速力を緩めて、追駈けて來た監督を待つた。お廻りさん達は大汗である。

「同行せい。怪しからん、五十哩も出して居る」

「五十哩？　たつた……百哩位出すつもりだつたに」

兎に角同行は本望である。青年は大人しく附いて行つた。勿論拘留と云ふことに決定して、留置場へ引いて行かれた。が喜び勇んでやつて來た、テッディの夢も束の間。其の目指す留置所は

「何處だ」

「此處だ」

「違ふ、此處ぢやない。白い薔薇が内に澤山咲いてゐる所だ」

「それはハドソン區だ」

此處はベルゲン區の管轄だといふのである。何といふ馬鹿を見たらう、こんな所なら來るのぢや無かつた。併し間違つたのだと云つても、出しては呉れなかつた。勝手に出られぬのが規則ださうだ。仕方なしに不快な役目を過したあゝ放免までの長かつたこと！

俺は神經衰弱だ、確かに常人の頭ぢやない。或る日博士の所へ出掛けて行つた。

「御診察を願ひたい」

脈、體温、舌の色、心臓の鼓動から肺の加減まで、一つ殘らず叮嚀に見た。

「別に何處にも異狀はありませんな」

「否、あるんです。確かに異狀を呈して居る筈です」

「まあ君、一緒に散歩でもしやう。好い天氣だ、それが一番の自然療法さ」

やがて二人は出て行つた。此處はとある町辻、向ふの方に大人數人集りがし

て居る。何だらう。傍へ寄つて見ると、細長い男が熱心に演說をして居る。

「諸君よ、平和を熱愛せよ。平和は詩だ、藝術だ、極樂だ。諸君よ、平和を熱望せよ、心靜かなるものに祝福あれ……」

「彼奴だ！」

八百屋の方へ駈け出して、店口で大聲に

「オイ馬鈴薯の手頃なところを、七つばかり吳れ」

博士は眼を圓くした。これは本當の狂人なのかも知れない。何だか變だ。

「君、そんなもの、何うする氣だ？」

テッディは無言。やがて群集の後から、狙を定めて發止、痛快！　又一つ發止、益々痛快！　平和論者のヘンリー・ピンチトは驚いた。寢耳に水よりも、演說面に馬鈴薯の方が、いくら痛いか知れぬ。鼻の宿替位自分では我慢が出來るとしても、金絲鳥の令孃に嫌はられたら萬事休矣だ。

もう一人驚いたのは博士だ。君子危きに近寄らず、喧嘩の傍杖を食ふのは肘鐵砲を食ふよりも不味い、逃げろ〳〵。博士は駈け出した。彼奴だ！　追つかけて來たのは探偵であつた。

「俺だ、俺だ、その人ぢやない」

テッディは後から追つ駈けて怒鳴つたが駄目だつた。

「何が故に逃げ出したのだ？　兎も角も同行せよ」

俺も序に——と云つても、テッディは取殘されてしまつた。

九　ドヂるために

如何にすれば、あの懷しい獄屋へ歸られるだらう？　テッディは獨り思考を廻らした。さうだ、あの男に限る。ふと胸に浮んだのは、戀しい獄屋生活の時のことである。丁度牢屋の向ふ隣に泥棒のダップといふ奴が居つた。煙草を一

本投げてやつたのが縁になつて、懇意な話もする樣になつた。

「おい兄弟、娑婆へ出たら一緒に仕事をしやうぜ」

ダップの奴は、よくかう言つたつけ。さうだ、泥棒がいゝ。彼奴に傳授を賴むに限る。

テッディはダップの隱れ家へ出かけて行つた。

「おい、俺に泥棒の傳授をして呉れ。お金はいくらでも出す」

「お金なんか不用いや」

案外心は綺麗だ。併かも叮嚀に敎へて呉れた。

「俺は捕らはれたいんだが……」

「あはゝゝ、兄弟面白いことを言ふ。いや、夫れ位の度胸で居なけりや面白い仕事は出來ねえ。だが確りしねえと、本當にドヂるぞ」

それからテッディは其處を出た。月も大分傾いて、道路もそろ〳〵薄暗くな

つた。夜も餘程更けたらしい。通り懸りの立派な屋敷、彼は敎へられた通りにうまく忍び入つた。そして本望通りに逮捕されたのである。けれども其處はバンチトの家だつた。そして彼の呪ふべき親子の者——金絲鳥の令孃と、それから其の親父のゼニングスの二人が、招待せられて來て居つた。

テッディは警察官に、腕を後へ縛られて、嚴めしく從行させられたのである。こ其の姿を見たのは、來客の令孃、金絲鳥の娘だつた。

「おや！　貴方はまあ……」

「やかましい。貴孃が知つたことぢや無い。僕には僕の考があるのだ！　爆發女に用はない」

「不可せん、不可せん。この方は自暴になつて居るのです。この方には罪が無い、責任は無いのです、無責任の人です……」

許してやつて呉れ、といふのだ。彼の女は手を合はせる樣にして、警察官に

嘆願した。テッディは遂に許されてしまつた。

「呪ふべき女！　あなたは、まだ僕の生活を爆發させて呉れるんですか」

かう言つて悔しがつた、けれどもう仕方が無かつた。あゝ萬事休矣。何故僕はこんなに不運だらう。

一〇　密告の手紙

ある朝であつた。空はブリュー色に澄み渡つて、うらゝかな日の影、柳の糸の漸く動く程の風、實に平和の朝だつた。俄然！　此の平和を破つて、天地を投げ出した爆發の音、いや響、いや轟き。忽ち土煙は天を覆ふかと見る間に、再びジェルシーは砲彈の落下、銃丸の雨、第二回アテネ食品工場の爆發、實は此處も軍器密造の一工場であつた。

警察の前には、群集が潮の樣に押し寄せて來た。

「何の爲の警察權だ」

「無能だ、署長を引きづり出せ」

「引責しろ。署長出ろ」

中風の署長は、齒を食ひ縛つて悔しがつた。不具合な足に地團駄を踏んだ。

「諸君、少しの間待つて呉れ給へ。今部下が來る筈だから」

部下の探偵は飛び込んで來た。

「今度こそです。署長、御覽下さい、此の手紙が……」

彼の手の裡には紙片があつた。密告の手紙だ。

今日第七工場の裏口へ、犯人は現れん。

群集は一應引き上げた。探偵は腕により、をかけて待つて居た。第七工場、其處の壁の間に身を忍ばせて、右を見、左見する彼の眼は、小鳥を狙ふ鷹の樣である、かゝる間も、胸の嬉しさを禁ずることは出來なかつた。さうだ「爆發犯

人を逮捕してから」と署長は云つた。今日逮捕すれば、何日頃お孃さんと結婚する樣になるだらう？　早く犯人が來ればよい。もしや嘘では無いだらうか。多少不安を生じた時、其の心配は無用であつた。嘘では無くて目指す犯人は現れた。

「御用だッ！」

犯人は造作もなく捕まつた。おゝそれはテッディ青年である。これほど弱い奴とは思はなかつた。何だか張合抜の氣味、だが嬉しい、お孃さんだ……。

テッディは、再び昔馴染の鐵の門を潜つた。戀しい懷しい薔薇の花、思ひ出多き十三號室！　併し彼の入れられたのは、其の樂しき「彼の室」では無かつた。

「あゝ、令孃に會ひ度い」

折角來ては見たものゝ、何だか當が外れた樣だ。せめて夢になりと會つて見

やう。だが淋しいなあ。物足らぬ心持の一夜を過した。

翌る朝、彼は眼を醒した。おゝ！　其處に立つて居るのは令孃である。彼は飛び上つて喜んだ。さうだ、始めて此の令孃に會つたのも、此處へ來た翌る日の朝であつた。併し其の時は微笑して居た。然るに今日は、今日は令孃の嬉しさうな顏が……何が悲しいのだらう。

「お久しうございました！　私あなたに會ひ度くつて會ひ度くつて……」

言ひかけて、よゝこばかりに咽び泣く。

「僕だつて會ひたかつたんです。會ひ度いものだから、何べんも、此處へ來る樣にやつたんですが、何時も失敗してね……」

「まあ、あなたは其れ程まで、私を……」

驚は再び泣いた。が悲しくて泣くのぢやなかつた。これが嬉し泣こいふものか知ら。

「あゝ終身懲役になりたいなあ」

一一 犯人を殺せ

其の日の新聞に、初號活字で書き立てゝあつた。

爆發犯人遂に捕はる

テッディ――犯人の名を讀んだ幾萬人の人々の中に、顏色を變へて立ち上つた男があつた。

「野郎、遂々ドヂりやがつたな、併し打棄つても置けねえ、何とかして助けてやらう」

彼はかの泥棒のダップであつた。

「犯人が現れたのは、實に吾々平和論者の、安全を固めたものですね」

盃を擧げて、妙な笑ひ方をしたのは、細長いバンチトである。

「これだから平和論者に限ります」

再び同じ言葉を繰り返したのは、ゼニングスであつた。流石に金絲鳥の令孃は、沈默つて何か考へて居る。

工場の近所に居て、爆發の砂を浴びた人々は、集つてかう叫んだ。

「私刑だ、私刑だ、遣付けろ！」

この時、ジャニー孃とテッディとは、牢屋の窓に長閑であつた。

「あなたは、署長の令孃、僕の樣な重罪犯人の所へ來ては、惡くは無いですか？」

「いゝえ、私は絶對にあなたを信じます。父だつて『眞犯人は外にあるかも知れぬ』と申して居りました」

「いや、夫れは違ふ。犯人は僕です、僕が眞犯人です。僕は終身懲役になりたいんです」

「あなたは、夫れ程までに……此處は恐ろしい、地獄の樣な所ですよ」
「僕には極樂です。天國です。樂しい〳〵所なんです」
「まあ！　あなたは……私、私、嬉しくつて……」
女はよく泣くものだと、テッディは思つた。併し何だか可愛い〻樣な氣がして、ハンカチを出して涙を拭いてやつた。
と其處へ面會人が來た。泥棒のダップである。
「遂々ドヂりやがつたな」
「アハヽヽ、僕の捕まつたのは泥棒ぢやない。例の爆發の一件さ」
「うんにや、違ふ。爆發の犯人は貴樣ぢやない」
「でも、本人が其う言つて居るぢやないか、僕は終身懲役になるのだ」
「貴樣が何と云つても、眞犯人は貴樣ぢやない。犯人は外にある。僕には證據が有るのだ、是を見ろ」

出したのは一枚の紙片である。
×四月十日、午前十時——カツドル第一クリーム工場
×四月十五日、午前八時——アテネ食料品工場
×四月二十日、午後十時——ユニヴアーサル食品工場
「何だい？　これは……」
「手前、此の間の晩、俺の家からの歸りがけ、何處か仕事に這入つたらう？」
「よく知つて居るな」
「うん、あの晩手前が仕事をしても、未だドヂりはしまいかと、多少氣懸りでもあつたし、兄弟分の甲斐には、もし間違つたら助けてやらうと思つて、後をつけて行つたのだ。けど貴樣が、ひらりと飛び込んだ早業を見て、兄貴分の俺にも及ばぬ腕前だと、感心と安心と二つして、歸らうと思つて居たら、中で騒ぎ出した」

「うん、あの時折角うまく捕つて居た所へ……」

「俺が急いで飛び込んで見たら、何だか小綺麗な女つ子が、一生懸命でお廻りに頼んでゐた。彼女手前の色か」

「戯談言ふな、彼女は僕の敵だ。呪ふべき奴だ。まあ詳しいことは後で話す。それからどうした」

「手前が捕縛を許されたから、俺も用が無くなつた。が行きがけの駄賃に何か無いかと思つて、主人の居間へ行つて見た。すると机の上に、大切さうに乗せて有つたのが此の紙片だ。何の氣なしで讀んで見ると驚いた、此の頃世間を騒がして居る、爆發事件の陰謀ぢやないか。こいつ好いものが手に入つた、持つて居れば何かの役に立つだらうと思つて、持つて歸つたのが手前の運の開けだ兄弟！　俺だつて元からの惡人ぢやあ無いんだ。これでも隨分お國の爲なら、つまらぬ奴だか命やあ投げ出すんだ。おい、茲は一番働き時だぜ！」

「十六、十七、十八、十九、今日は十九日か。二十日と云へば明日だな。よし萬事は僕にまかせろ！」

一二　お輕快なる我がテッディ

私刑の夜は來た、覆面をした群集の波は、留置場へ留置場へと流れて行く。

「犯人を渡せ」

「國賊を渡せ、國賊を」

「獨探出ろ、軍器爆發の犯人を引きずり出せ」

「國家の爲、我々が刑罰を科するのだ。犯人を渡せ、渡さぬ奴はやはり國賊だぞ」

「それ、ブチ壞して踏ン込め！」

彼等は遂に鐵門を破つた。テッディの檻房へ！

時、恰も四月二十日の夜、午後九時三十分！

陰謀の計畫は今夜だ。第三回目の爆發、ユニヴァーサル工場。何こ言ふ恐ろしい夜だ。テッディ青年は今、身の毛も戰慄つ私刑を受けるのだ。

併しテッディは平然こして、群集に向つて大聲に云つた。

「諸君！　最後の頼みだ。計畫齟齬して仆れるのは口惜しい。願はくは、今一つ殘つたヴァーサル工場を横に睨んで死にたい。諸君許せ！」

言ふより早く身を躍らせて、群集中に飛び込んだ。おゝ輕快なる彼の活動振よ。邪魔する奴は、右に左に突き除けた。追つかけて組みつく奴は、可愛さうだが取つて投げた。漸く群集の中を出る。

「や！　貴嬢は……」

「妾、どう仕ませう」

「危いッ！　なに、今に歸つて來ます」

テッディ青年は駈け出した、猿の如く、兎の如く。さうだ最早や十時だ！

此處はヴァーサル工場。

「待てッ」

猿臂を伸ばしてグッと押へた奴は、紛ふ方なき細長い男。

「おゝ、貴樣は此の俺を、爆發させた導火線だ。それにも懲きずに又此處を……さあ白狀しろ、此の獨探奴」

「なに、こら馬鹿なこを言ふな、何が獨探だ。何故僕が獨探だ」

「盜人猛々しいこは貴樣のことだ、國家の兵器を爆發させる奴は、立派な獨探だ。貴樣是れに覺えが有らう？」

懷中から取り出した陰謀の計畫書。

「えッ。なに、其んなもの俺は知らぬ。こんな紙片が證據になるか、斯うして破つて捨てゝしまへ」

「アッ、貴様證據を捨てゝしまつたな。よし、ぢやあ聞くが、貴様此處へ何爲に來た」

「用があつて來たのだ」

「用？　何用だ」

「何用で有らうと、貴様の知つたことぢやない」

「己れ、まだ陰すか。よし、俺が證據を見せてやる」

ぐつと手を突つこんだパンチトの懷中。最前から押へて居つた手を捻ぢ上げられて、一と溜りも無く取り出されてしまつた。

テッディをして、悲しき思ひあらしめた、かの心臟爆發の導火線、平和論者の隊長、ヘンリー。パンチトは、遂に見苦しいながらも罪に服した。私刑に集つた覆面の群集が、テッディ青年を取り圍んで、萬歳を三唱したのは、それから二十分ばかり後であつた。兵器爆發の眞犯人は、最早や警察官の手に渡され

て居つた。

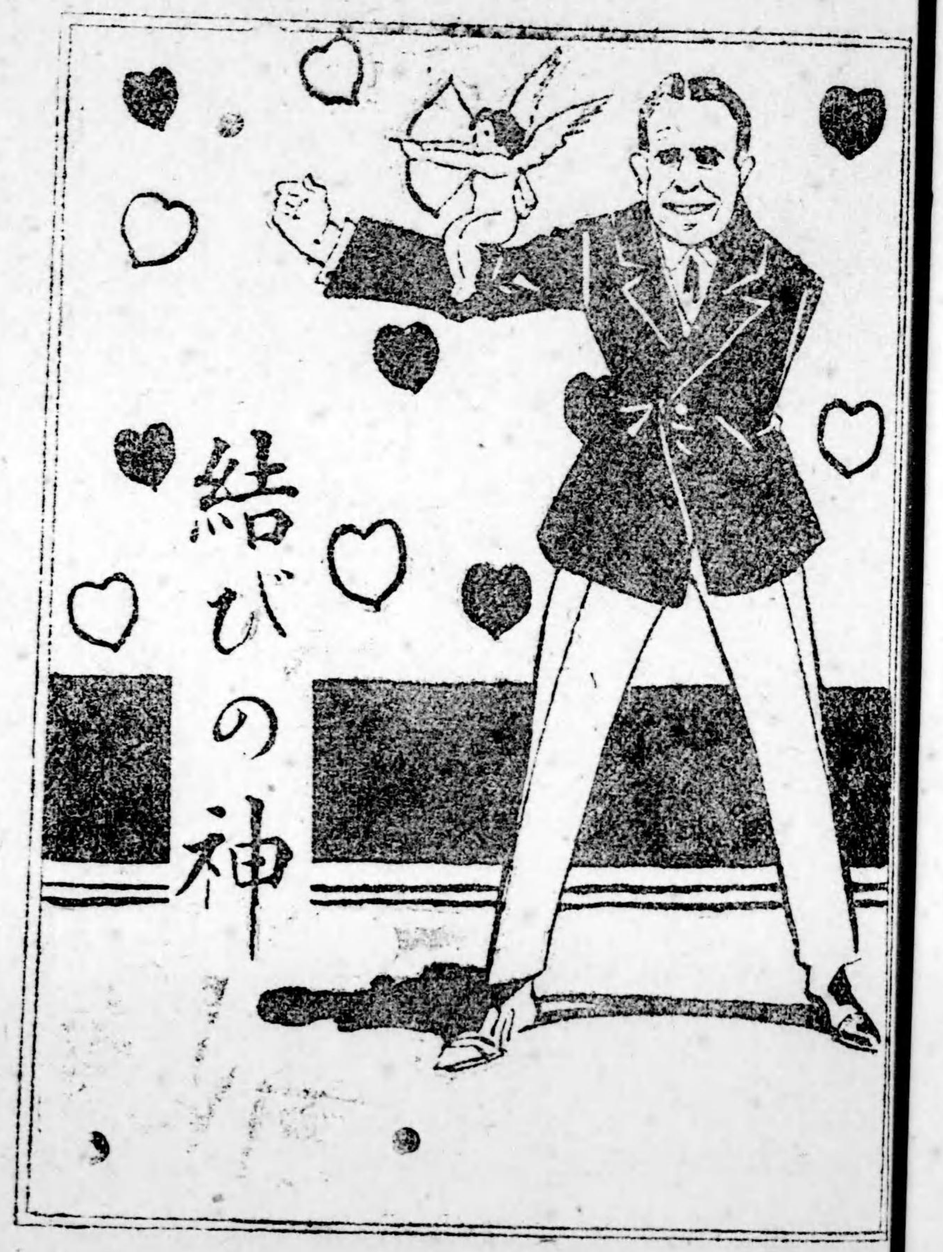
テッディ青年の鐵の樣な腕に、此の時　軟く卷きついたものがある。おゝわがジャニーさんの手であつた、何時の間に來たのか。

「爆發の犯人を逮捕して來い、結婚の相談は其の時にする」

これは曾つて父署長が、部下に叫んだ言葉である。さうして今其の眞犯人を逮捕した者は……。

言ふ迄も無くジャニー孃は、目出度くテッディ青年と結婚をした。茲に附記して置き度いのは、此の結婚式の介添役はかの泥棒のダップだつた。

事の顚末を新聞で讀んだ時、金絲鳥孃がいつまでもいつまでも、其の上へ顏を伏せたまゝ、咽び泣いて居たとか言ふ。


結びの神

結びの神

一　自慢の策略

スピードとレギナルドとは、同じ大學に通つて居て、友達が羨む程の仲よしであつた。スピードは氣樂な、何日も愉快さうな顏をして居る男で、レギナルドはやゝ大人振つた温順しい男たつた。從つて何方かと言へば、女好きのする方で、現に彼にはマージョリーといふ美しい氣の優しい愛人がある。

恰度試驗の濟んだ日、スピードはレギナルドの下宿を訪れた。すると彼はさも困つたらしい顏付きをして、手紙を擴げて居たので、

「おい、何か思案でもするやうな事件が起つたのかい。隨分沈み込んでるぢやないか。」

こ、親しい間柄、いきなり肩をぽんこ叩いた。

「ごうも困つたことが出來上つてしまつたのだ。實はこれから君の家へ相談に行つて、例の奇想天外に落ちるこいふやうな妙案を授からうこ思つて居たのだが、恰度い、所へ來てくれたね。」

「又マージョリーさんのことで心配して居るのかい。」

「ごうして、そんな暢氣なことぢやないよ。殊に彼女の方は、君からの仲介で近頃は又素晴しい仲になつてしまつたからね、その邊は大いに安心してくれたまへ。」

「では一體如何用件なんだ。」

「實は、僕は十五年前に故郷を出てから、一度も歸へつたことがないがね。今度突然伯父の許から、試驗が濟んだら直ぐ歸へつてくれこ言つて來たのだ。無論歸へるのは關はないさ。歸へるのは關はないけれごも、僕が歸へると、伯父

は、オリーブこかいふ女と結婚させやうこ考へて居るらしい。そして財産全部を僕に讓らうといふのだがね。……財産を貰ふのはいゝが、女を突き付けられては、全く困るからね。マージョリーさんとは、御承知の通りの間柄になつてゐるので……」

「しかし、それは君の方から事情を打ち明けて話せばいゝぢやないか。」

「ところがそれは素人考へなんだよ。普通の人間なら、それで承諾するかも知れないが、僕のヘンリー伯父と來たら、それは〳〵頑固で因强で大變なんだ。自分が好きなこなら、誰にもそれを强いやうといふ主義で、そいつを斷はりでもしやうものなら、最後、ぷん〳〵怒つてしまふのだ。……だからマージョリーさんといふものがあるからと言つて、その女を拒絶するこなると、又一揉着起さなければならなくなつて來るからね。」

「すると君の伯父さんも、案外世紀後れなんだね。」